

○御多佳さんの中節 大長寺と與次兵衛、河東節の熊野
宇治文庫 宇治紫文齋

*シテあづまうけ出せ山崎與次兵衛 ツレうけ出せ / 山崎與次兵衛 合いつかおもひの □
下紐とけて 合昔思へばうやつらや忍昔も 下うやつらや 本ころしシテイロ 情なや誰あらふ
□山崎與次兵衛 下様としては人におくれを亂髮の △あづまがかほも
ワキ「アレあれをみや虫さへもシテつがひはなれぬあげ羽の蝶 ツレ「われ / とてもふ
たりづれすゐなどふしの シテ中々に春にもそだち ワキ花さそふ シテ茶種は蝶の ワキ花
しらす シテ蝶は茶種の ワキあぢしらす シテしらす ワキしられぬ シテ中ならば ワキうか
れまいもの シテさりとては ワキくるふまいもの シテあぢきなや

断片

——大正四年一月頃より十一月頃まで——

— 『硝子戸の中』 —

- 片断
- (1) 卯年
 - (2) 猫
 - (3) 犬
 - (4) 或女の告白
 - (5) チャブドウ
 - (6) 書いたものを見てくれと云つた女ニ告げたこと
 - (7) 戦争と病氣
 - (8) 癩病者曰クそれは人間ニいふ事せう
 - (9) 福井利吉郎
 - (10) 講演 十圓切符 十圓ノ禮ニ就て
 - (11) 實際問題ノ應用、

- (12) 藪錦山、岩崎太郎次
- (13) 燒禪、「二字不明」
- (14) 生と死
- (15) 武者小路ノ送書籍
- (16) 畫ノカキ始メ、湯淺、今ハ不愉快ヲ逃レルため、
寺田との議論 (1) positive artistic impulse
(2) 反響

- (17) 星ノ音
- (18) Carlisle read Jane Austen
During Transvaal general Smuts read Kant's Critique of Pure Reason.
ヌツツ

- Marcus Aurelius, Julius Caesar, Julian the Apostate
- (19) German publisher
- (20) 電話始末書
- (21) 電燈が消える筈がないと理論上主張しても消える事實は消滅しない。
- (22) 楠緒子 妾ヲ撃退ス
- (23) 獨乙ノ本屋 几帳面
- 24 芥舟

- 九寸五分
- 益さん、
- 楠緒さん
- 靴ヲ貸セ
- 元日
- 岩波ノ机
- 南畝莠言
- 回復力 繼續力
- 花賣
- 倉吉
- 下女ノ密告
- 最負
- 22 the rich and the poor
- 23 Georg Brandes
- 24 take some works of art and philosophy, with the value set upon them by the nation
in which they are produced. Gosse, Saintsbury famous reviews

- 25 陽氣ノ加減で氣が變ニナツタ
- 26 人ノ草稿ヲ讀ムヲ、卒業論文ノ話、
- 27 維新ノ際ニ生レタラバ
- 28 自分ノ書いたものを見て呉れと云つた人ニ話せし事。 社交ニアラズ、自己ノ弱點ヲサラケ出サズニ人カラ利益ハ受ケラレナイ、自己ノ弱點ヲサラケ出サズニ人ニ利益ハ與ヘラレナイ
- 多クノ人ニ接シナケレバ人間ハ分ラナイ、多クノ人ニ接スルト人間ガスレル、墮落シナイデ多クノ人ヲ知り、知ツタ知識ヲ自己ノ特色ニ取り入れる
- 29 Entropy. 力學ノ行キツマリ、
- 30 大塚夫人の事、妾撃退
- 31 自己は人の理解し得ザル美點ヲ承知シテゐる。人ハ自己の理解し得ザル缺點ヲ知ツテゐる。

二

- 水明莊 (牡詩殘夜水明樓)
- 冷冷莊 (ハ冷々脩竹待王歸)
- 竹外莊 竹外風煙開秀色 文衡山
- 寂庵莊

虛室生白 虛白高人靜

三川莊

曠然莊

如一山莊

澄懷山莊

從生山莊

回觀莊

澄明莊

半眞山莊

空碧莊

曠然蕩心目

雲水空如一

凝神著書澄懷觀道

功名多向客中立禍患常從巧處生

靜中見得天機妙閑裡回觀世路難

澄明遠水生光重疊暮山聳翠

心事半眞半僞世故半濃半淡

草堂春綠竹溪空碧

三

○書物を送ると其返事。

×善良なる人、利口な人、同じ結果、返事をすぐよこす。

○多忙の人、無頓着の人、無禮な人、病氣其他の事故ある人、返事をよこさず

○自覺なきものは度し易し、自覺あるものは度しがたし。

片斷

× 癖などは氣を付けてやればすぐさうかと肯ふ。
 × 自分が自覺して善もしくは美と信じたる事は到底人の勸告に應じて其否を肯はず
 × だから人を啓發するといふ事は、先方で一步足を此方の領分へ踏み込んだ時に手を出して援ける時に限る。

○ 大我は無我と一ナリ故に自力は他力と通ず

○ 藝術的衝動と好意は必ずしも一致せず。好意あれども藝術的衝動なき場合はいかに好意に満ちたりとていゝものを書いたり畫いたりする事能はず

○ 猫が庭の木立の下に寐てゐる。椅子に腰をかけた私を見てゐる。姿勢は落付拂つてゐる。然し呼吸がはげしい。自分に似てゐる

○ 猫が時「々」雀をとる事を思ふと猫を飼ふのがいやになる

○ 御多佳へ手紙、アイトと人格、人格の感化とは悪人が善人に降参する事

○ 露西亞の音楽はピアンスキと綴つてスラギアンスキと讀むのか。冠り、赤と調、薄青の調、靴サラサ模様

○ 早稻田ノベースボール

○ 純一と伸六 縁の下へ寐る

○ 宿雨晴れ染めつけたやうな

○ 寶寺

○ 森がきて早稻田の野球試合に誘ひ出す。戸塚のグラウンドを望むと人の雲が一ばいに層をなして廣い原を取り圍んでゐる。遠い屋根の上にも豆の様な人の顔が見える。それが日光に照らされた瓦の上に立つた儘少しも動かない。高い所に赤毛布に竿をつけたものが風になびいてゐる。其毛布は古いもので所々に穴のあいてゐるのが遠くから能く見える。それから黒い筋が二本入つてゐるのも明らさまに毛布だと名乗つてゐるやうで多少無雜作な面白味を興へた。

場内は人で埋つてゐるので何所が入り口か丸で分らない。たどひ解つても這入れさうにない。森は自分の繩張所へ這入るといふ氣があるので人と人の間を裂き割るやうにして這入つてしまつた。自分が出る事も引く事も出来なかつた。

一高はサードベースの側を一杯占領してゐた。其數は千人位もあらう。皆白い旗を持つてそれを一度に動かす眼がちら／＼する。自分の頭の上に居る男が比較的大きな旗を持つてゐてそれを夢中で振ると旗の端がびたり／＼と自分の頭や頬にあたる。一齊にたつて怒鳴ると砂ほこりが立つ。衣服其他が黄色いこななぶれになる。

・ 第一ベースの方の赤旗は是亦より綺麗にちら／＼した。赤い着物に袴をつけた人が號令をかけた。自分達のゐる北側の赤連の號令者は青坊主であつた。

片斷
 十對五で一高が負けた時白軍は急に大風のあとのやうに靜まつた。千人の人が一人も口を開か

なかつた。黙々として密集した隊伍が細い道をつゞいた。自分の前には太鼓をかついだ男が二人で歩いて行つた。力がぬけて元氣がなささうに見えた。森が「撰手が泣いてゐる」と云つた。私はどこだらうと思つて見たが多人數に遮ぎられて見えなかつた。

行列が一時とまつた。「撰手が歩けないのです」と森が又自分に告げた。早稻田大學の北門を入つて講堂の前へ出ると一高の生徒がみんな地面の上へあぐらをかいて休息してゐる。肅然として一語を發するものがなかつた。

○伸六が八十五錢の喇叭を買へと云ふのを排斥されたので怒つて縁の下へ這入つてしまつた。どうしても出て來ない。あい子が海苔巻を縁の下へ出すと、怒つてゐる伸六も食ひたいと見えて、パクリと食ふのださうである。其代り口は決して利かない。

純一が怒つた時は裸で縁の下へ寐てゐて是亦どうしても出て來ない。さうして人が近寄ると泥をつゝかんで抛げる

○寶寺で爵金木綿の財布をもらつて、手のひらを才植で打つてもらつてその手の平を握つた儘門の處來る、後ろを振り返つちやいけない

○痔の療治

○塩原

○江戸川終點の昔の光景

○生よりも死、然し是では生を厭ふといふ意味があるから、生死を一貫しなくてはならない、(も

しくは超越)すると現象即實在、相對即絶對でなくては不可になる。「それは理窟でさうなる順序だと考へる丈なのでせう」「さうかも知れない」「考へてそこへ到れるのですか」「たゞ行きたいと思ふのです」

○御松、倉吉、

○煽風器の風は紐の中から出る

○寺田の鯨の食方

○心中のあとの夏蜜柑とピールの空蟻

○伸六曰く御父さま犬は仁參たべる？

○獄中で鳩を飼ふ話

○技巧の變化、(右、左、縦、横、筋違) さうしていづれも不成功の時、どうしたら成功するだらう？といふ質問を出して又次の技巧を考へる。さうして技巧は如何なる技巧でも駄目だといふ事には氣がつかず。人間の萬事はことごとく技巧で解決のつくものと考へる。さうして凡ての技巧のうちどれかゞ中るだらうと思ふ。彼等が誠に歸るのは何時の日であらう。彼等は技巧で生活してゐる。恰も水の中に生活してゐる魚が空氣といふ觀念がない癖にどうしたら地上を歩く事が出来るかと工夫するやうなものである。

○××の結婚。××の死亡。××の死亡

○aが依頼するからbが芝居へつれて行つて遣る。又は御召の着物を買つてやる。又は畫をかい
てやる、書をかいてやる。

- (1) bはaに満足を興へるためと思つてゐる。
- (2) aは反對にbが自分の虚榮心を満足させるための發現と思ふ
- (3) それでbの力量以上のものが世間には色々あるといふ事をわざとらしい方法でbに示して其
鼻を挫かうとする。bはaに對して厭な心持を起す
- (4) 此場合bはaの幸福を目的として働らいてゐる、aは又bの弱點を中心としてbに働らき返
してゐる。矛盾は其處から出る。

○人の名聲がなくなるといふ本當の意味は其人の行動なり作物なり言論なりが死んでしまふとい
ふ意味である。夫等が死んでしまふといふ意味は夫等に接觸する凡ての人に何の働らきも起さな
いといふ意味である。つまり夫等は其儘存在してゐても夫等の働らきが死ぬといふ事である。も
し此働らきが死ぬ以上は拱手して坐つてゐても其人の名聲は死んでしまふのである。
然し其働らきが残つてゐる以上、又其働らきが強烈である以上、いくら外部から政略的に其人
の名聲を亡ぼさうと思つても駄目である。

其理由

- (1) 暴力以外に其人の言論なり作物なりを封鎖して接觸の途を絶つ譯に行かない。
- (2) 悪聲丈ではそれ丈の力が出てくる筈がない。黙殺でも同じ事である。(積極消極の區別があ

る丈で)

(3) 悪聲と黙殺は心的状態を變化するけれども、たゞ評番といふ丈だから、其人の實際の言論な
り作物なりに比べると働らきが間接である。従つてより多く器械的である。いくら太陽は冷たい
と云ひふらしても、實際太陽の光に浴する刹那に反對の結論を自知するやうなものである。

(4) だから力のあるものを亡ぼすためには當人の悪口をいつたり冷罵したり其他凡て當人を傷け
るやうな策をめぐらすのは近途のやうで却つて迂遠なのである。策略として最も効力あるのは、
(本人は其儘にして置いて)本人から動かされる一般の人々の方に働らきかけるにある。しかも器
械的に威壓的にやるのは一時性の効力しかないのだから、もし働らくとすれば、心理的に働らか
なければならぬ。即ち其人々の心的状態を自分達の都合のいゝやうに變化させるのである。其
人の言論作物に對して没交渉に済まし返つてゐられるやうに人々の心を改造するのである。所が
それが策略丈で(相當の根據なく)出来る業だらうか?とて出来ぬ。換言すれば不自然は自然
には勝てないのである。技巧は天に負けるのである。策略として最も効力あるものが到底實行で
きないものだとする、つまり策略は役に立たないといふ事になる。自然に任せて置くがいと
いふ方針が最上だといふ事に歸着する。

片断

○形式論理で人の口を塞ぐ事は出来るけれども人の心を服する事は出来ない。それでは無論理で
人の心を服する事が出来るのか。そんな筈もない。論理は實質から湧き出すから生きてくるので
ある。ころ柿が甘ひ白砂糖を内部から吹き出すやうなものである。形式的な論理は人形に正宗の

刀を持たせたと一般で、實質の推移から出る——否推移其物をあとづけると鮮やかに讀まれる自然の論理は名人が名刀を持つたと同じ事で決して離れ／＼にはならないのである。

○ Temptation ヲ resist スルト云ふ以上は對象が本當の誘惑でなくてはならない筈だ。偽りの誘惑即ち見せかけ又は誘惑の相を具したものを斥けたといつて、其人は誘惑に打ち勝つたのも何でもない。其人はたゞ相手の技巧に打ち勝つたのである。たゞ手に乗らなかつたといふ丈である。従つて誘惑を斥けるといふ事が徳義上堅固な所を發揮する美德としても、此人は此場合毫も賞するに足らないのである。夫から相手はもと／＼策略をやつたのだから、どうしたつて不正欺瞞の誹を免かれないのである。

技巧を弄して人を釣らうとして否人が釣られるか釣られないか試験して見やうとして人がそれに釣られなかつたから、あなたは感心だ試験に及第しましたと云つたら、賞められた人はいややはあなたの技巧が嫌だつたので、技巧が表はさうとしてゐるもの愛なり金なりが嫌なのではありませんかと答へる丈である。夫から「あなたは感心だ堅固だと云つて私を賞めて下さるけれども、私を賞めさへすれば私が嬉しがると思つてゐるのですか、馬鹿々々しい。よし私が嬉しがるとした所で、あなたは夫で平氣でゐられるのですか、あなたが私に働らきかけた技巧即ち虚偽は私の人格を侮辱したものではありませんか。其罪は(私に對する)どうする積なのですか。まさか私を賞めたからと云つて其罪が消滅するものでもありませんまい。私はあなたから下さる讚辭を謹んで御返却申します。それからあなたの人格を輕蔑する事を公言致します」と答へる丈である。

○ 心機一轉。 外部の刺戟による。又内部の膠着力による。

○ 一度絶對の境地に達して、又相對に首を出したものは容易に心機一轉が出来る

○ 屢絶對の境地に達するものは屢心機一轉する事を得

○ 自由に絶對の境地に入るものは自由に心機の一轉を得

○ general case へ人事上殆んど應用きかず。人事は particular case ノ。其 particular case ヲ知るものは本人のみ。

小説は此特殊な場合を一般の場合に引き直して見せるもの(ある解釋)。特殊故に刺戟あり、一般故に首肯せらる。(みんなに訴へる事が出来る)

○ うら盆、 眞こもの敷物の上に供物、蓮の葉の中に芋、枝豆、サ、ギ、一方の蓮の葉の中には鬼灯、青葡萄、瓜、桃 茶碗の上のみそ萩

○ 伸六(八) インキ「ン」ダムシの事を南京魂といふ。

○ あい子(十一) 怒つて曰く御立腹だから面會は出来ないよ

○ 少しく、コウケン、してしまつたといふ言葉を使ふ。少し厭になつたといふ事なり

○ ガブ、チク、だよといふ言葉を使ふ。もう返さないといふ事なり

四

カ絣、の例。

×極力細カクスルト勞力多き故價值高し。然細かさの適度以上になる。故にそれを着るものは趣味ハドウデモ金を見てくれといふ事になる。

×若し金を見る事を知らぬものがそんな細かな絣の着物(高き)と適當の絣の着物(安き)を見て後者を撰ブナラバ、其人は趣味丈に忠實と云はなければならぬ

×何にも知らない門外漢が黒人に勝るのは此所にある。小兒が大人に勝るのは「は」此所にある。

× unsophisticated ダカラ。pure ダカラ。無邪氣ダカラ。

×此問題には道德をも含む。競争シテたゞ勝たう／＼の念が趣味性を害しても絣を細かくするのだから、ツマリ控目を知らナイトいふ事ニナル。虚榮といふ事になる

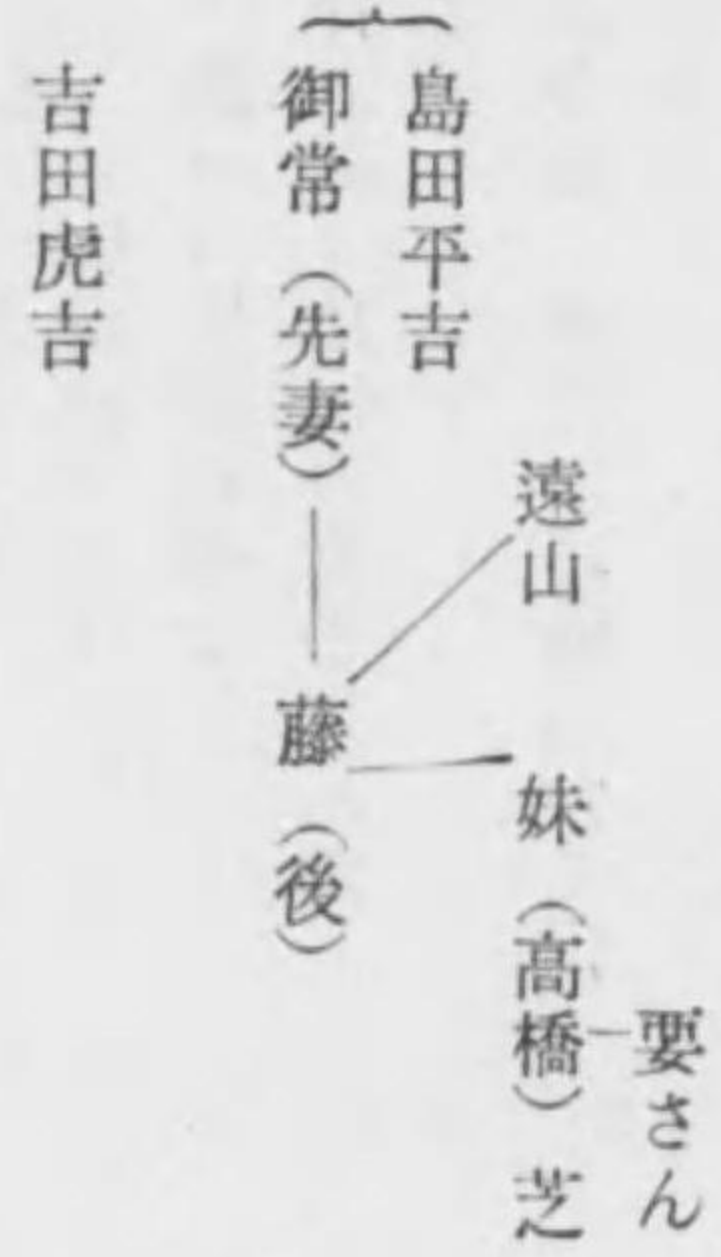
×同時に能力の可能性を發揮するといふ事にナル。intellectual 及 practical へ行ける所迄行くといふ事になる

×同時に行き詰れば何方カへ方向轉換をしなければならぬといふ事になる。さうして通路を開くといふ事になる。變化といふ事になる。意志(心理的にいふと)の疎通といふ事になる。掘りつくした鑛山見たやうなものでもうどうする事も出来ないものである。だからあまり盛になると衰へ

るのである。盛になりかたが悪いからである。

五. 『道草』

兄 長太郎
住 健三



片斷

比田寅八 姉(夏)
義兄

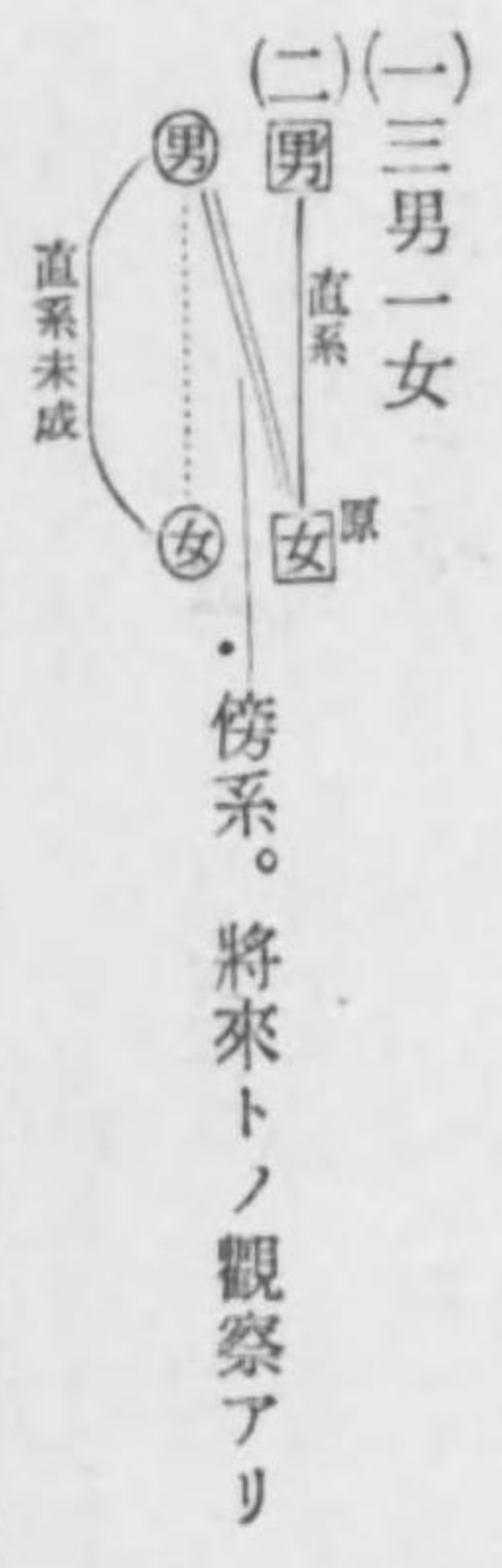
由よし
長太郎 喜代

お常 柴野房之助
柴野縫

一彦 比田の養子
作太郎 比田の實子死んだ

波多野 御常の再縁したる所。

六



男おとこ女おんなノ前ニテおとこニおんなをすゝむ。其時おとこノおんなに對する批評(耻ヲカ、セタといふ。嫉妬及び豫防線といふ) 男の公言する所(全くおんなとおとこのため)

(三)母の子他國で情婦(若くは妻)を作る。死。女母を尋ね来る。母亡子の記念の爲め女を愛惜す。しばらくして女ある男を愛す。これを母に打ち明ける(其援助を受ける確信ありて) 母大に怒る。亡子に貞ナラザル女を愛スル事能ハザル心理

豊後、養老、月影

T子、高野楨、ロレンジ、ワシントン子イブル
イブキ (下草物)

寒木犀、

琉球ツ、ジ
露原島、五月、
トケラ (ヒヨドリ)

ユウカリ (白き葉)
梅檀 (ハゼの様ナ實)

○パラソルの話

○細君賣淫の話
○芝居好ノレデーの話

子供、井戸側、丸木橋 千圓ヤル。髪結床 アイツ。
西洋人釣に行 小便

湯河原の川 藤木川
合して千歳川 向側ハ伊豆

十

The Portrait of Caterina Cornaro by Giorgione (finished by Titian)
Providence dealt capriciously with Caterina Cornaro in that, when the great age of Venetian portraiture began, her beauty had already become a legend. It was by the sight of her portrait that her uncle is said to have first caused the Lusignan to entertain

the idea of the match, and at the time of her betrothal the Senate, according to her biographer Colbertaldo, in the dearth, apparently, of native masters, commissioned a certain Dario of Treviso to paint her portrait as a gift to her future husband, who, in acknowledging it, said that he had never seen so beautiful a maiden. A Cypriote chronicler tells how, when she landed in her kingdom, the people proclaimed the return of Venus to her native Cyprus.

(1) 文展の繪、effort, 小笠原流、美術院、假装行列、

○已を空うして nature ヲ受ケ入れる

(極ハ寫眞。其寫眞と此種ノ繪ノ區別)

○已レノ寫眞ヲ nature ノ上ニ燒きつける。

例 文人畫

Symbolism 獨乙ノ畫ノ項參照

(2) 小説、ノ尤モ有義ナル役目ノ一ツトテ、

particular case ㄣ general case ニ reduce スル

× general case ㄣ general case トシテハ陳腐

× particular case ㄣ particular case トシテハ奇怪、

片斷

×新らしき刺撃アリテ然モ一般ニ appeal スル爲ニ第一ノ如クスル必要アリ、
 ※吾人ハ effect ノ爲ニ然スルノミナラズ、人道ノ爲ニ然セザル可ラズ

- (3) 古キ道德ヲ破壊スルハ新シキ道德ヲ建立スル時ニノミ許サレベキモノナリ。
- (4) 批評家、胸中ニ一ツノ固マリアルベカラズ。有ユル塊マリナカルベカラズ。他ノ尺度ヲ以テ他ヲ評セザルベカラズ、 versatile、賊馬ニ騎シテ賊ヲ逐フ、
- (5) 徹底ノ意、 absolute freedom アリヤ、妥協ナリ。徹底トハ omniscient ノ上ニナル妥協ナリ、
- (6) あらくれの評
- (7) 人ハ自分に相談シテ言動セズ。故ニ氣ニ入ラヌ者ナリ。若シ之ヲ忌マバ自己ノ標準ト他トヲ一致セシメザルベカラズ。或程度迄出来る。(感化的形式的ニ) 然シ他ノ立場ヲ考ヘナイ場合若クハ考ヘテモ理解デキナイ場合ハ全知ノ特權ヲ有ツテ居ナイ場合トテモ取除ク譯ニ行カナイ
- (8) 生死ハ透脱スベキモノナリ回避スベキ者ニアラズ。毀譽モ其通りナリ。

○ Nietzsche considered the Prussians dangerous to culture : he said that even the presence of a German retarded his digestion ; he poured scorn upon Treitschke and disliked Bismarck in his later years ; and above all he despised the notion of " Deutschland über Alles " and every kind of nationalism. It seems to us beyond question that it will and does operate to deepen all contempt, to lessen every kind of sympathy for those less fortunate and to lead to the most useless frittering even of individual gifts. For

the most highly gifted person needs more, not less, of the community sense, if he is to be of the service he might be ; and that is the reason for the superiority of Dostoevsky. " Nothing is true, everything is allowed " is dangerous no less to the rare than it is to the common man.

○大塚ノ哲學ノ系統 virgin prostitute

○竹鏡

○技巧ハ己ヲ偽ル者ニアラズ、己ヲ飾ルモノニアラズ、人ヲ欺クモノニアラズ。己レヲ遺憾ナク人ニ示ス道具ナリ。人格即技巧ナリ

○皆川ノ手紙ニ silk hat ヲ樽ノ様ナモノト書イテアツタリ

○奈良高師ノ徳永曰ク友達ハ出来マセン。要リマセント。余曰ク友達ハ絶対ニ要ラナイモノニアラズ。時ニヨリテ厄介ニナルナリ。重荷ヲ負フテ旅行スルガ如シ。脊負ツテ居ルウチハ厄介、宿ニ着ケバ役ニ立ツ。

○藝術ノミ豈一元論ヲ許サンヤ、萬法歸一、

片断
 ○或人ハ告白ガイ、ト云フ、或人ハ告白ガ悪イトイフ。告白ガイ、ノデモ悪イノデモ何デモナイ、人格ノアルモノガ告白ヲスレバ告白ガヨクナリ、シナケレバシナイ方ガヨクナルノデアル。美人ガ笑ヘバ笑フ方ガヨク泣ケバ泣ク方ガヨクナル様ナモノデアル。悪女ハ何方シテモイケナイノデ

- ゼエレン、キエルケゴオル。和辻哲郎
- 動物をいくら研究しても動物にはなれない
- 音楽會、猫や犬ヨリハ可からうと思つて行つた。
- Dostoevski ト Maeterlinck
- 戦争（歐洲） Kantカラ出タト云フ、Hegelカラ出たといふ
- 自分ノ作物ハ Bastardノ様ナ心持
- 高等工業ノ演説、
mechanical, universal, abstract laws application

日記

——大正四年十一月九日より同十七日頃まで——

十日〔火〕夜

- 百目四十錢の火薬、丸が十二錢
雉三百羽、雄五十錢
- 農と獵半々
- 鍛冶屋へ行く
- 鴨が居るか。雉か兎
- 何號で打つか。四號か五號です、六號でも打ちます
- 春になると羽が強くなるから三號だがね
- 犬はゐるか、走ります
- ぢや駄目だ。待つてゐないだらふ。ついて歩けない
- 犬は鐵砲の音を聞くとビシヤリト留る。鳥が落ちると留る。
- 此所いらの犬は食はずに持つてくるのは好いうちです
- 山鳥は犬が早くないと駄目だらう
- さうです。足の弱い人は輕便の下から上の方へ登つて行く。

○明日は行かれませんが、鹿狩に行きます。朝三時半に立ちます。先生と一所です。

○先生とは宗久といふ醫者。

○ボクはわますが田嶋はわません

○ヒヨはわますが十二號ぢや勿体ない。三十號位ならイ、デス

○雉や鶉は待つ犬でなければ駄目。山鳥は走る犬でなければ駄目

○山鳥は(シキミ林などの)窪に居る。水のジク／＼した所。山が枯れると能く分りますが、今は山がまだ青いから窪にもミヨにもわますから。雉子も野が枯れないと分りません

○禪關策進と白隠。慈明引錐

今ノ學人ハ生理、心理、ヲ知ル。故ニ臆病ナリ。又臆病ニナルベク餘儀ナクセラル、生理心理トモ科學ニシテ average menノ所有の現象の統計ヨリ來ルニ過ギズ。故ニ exceptionヲ許サ、ル如クニ考ヘラル。生徒學生、之ヲ學ブモノ皆自己ヲ average menト見做シ且ツ人ヲモ average menト見做スノ癖アリ。故ニ引錐等ノ事ヲ見テ能ハズトナス。(激勸的ノ師策ナキモ其原因ナリ)、只天才ハ自己ヲ average menト信ジナガラ生理心理ヲ尤モト心得ナガラそれニ背イタ行動ヲ餘儀ナクセラル、ナリ

十一日〔水〕

不動の瀧。橋二つ渡る。左の下河と田、右山(稍開きたる)の間を行く。其先に一軒家の茶店あり。溪流に臨む。右に上る數間にして瀧二筋天邊より來る。割合に樹木なく瀧の上に山なし。草山の間より岩出で其割け目より水が長く落ちる。少し下の右側よりも落ちる。

御茶屋の御神さん。色白く眉濃く赤い模様の襦袢を裾より下に一寸出してゐる。黒緋子の半襟をかける。どうして斯んな所に一人居られるかと思ふ。頓狂庵の妻君なる事分る。(日本橋ですといふ)

宿へ歸つて下女に聞くともと霞町の藝者だといふ。一寸驚ろかされる。頓狂庵に大分金を遣はした結果だといふ。翌十二日(宿の御神さんいふ。亭主は西洋小間物商の所御店が破産して此所へ來た所、あとから女も來たよし。(亭主はわた樽屋の息子なり)さうして藝者といふ名では出られないが師匠といふ名目で御客の座敷へ出たいといふ。ある日御客が來た時熱海へつれて行つて呉れと頼む。宿の御上さんと客夫婦と外に男もついて熱海へ行くと亭主が電話をかけてすぐ歸れといふ。夫から以後客にあれば亭主と一所でなければ座敷へ出ないといつてゐます云々

十二日〔木〕

夜來の雨で是公路がわるいので鐵砲打に行かないといふ。九時過伊豆山から熱海へ行かうと云ひ出す。馬車で出る。十時三十八分の輕便に間に合ひ過ぎて茶屋にやすむ。こまどりの話をしてゐる。上さん曰くした餅一、糖二、の割です。小飼だからよく馴れてゐます。此邊にある季節になるとこま鳥が里近く出て來ます。それを捕るのです

伊豆山の相模屋へ行く崖道を一丁半も下る。前はすぐ海なり。千人風呂へ入る書生さんが四五

人で泳いだりもぐつたり色々してゐる。

年四正大

露西亞人ノ50年輩ノ人ニ對する考

He (Afanasy Ivanovitch Totsky) was a man of five-and-fifty, of artistic temperament and extraordinary refinement. (The youngest トーナキ駄目)

The general with his knowledge of life attached the greatest value to Totsky's proposal from the first. As owing to certain special circumstances, Totsky was obliged to be extremely circumspect in his behaviour, and was merely feeling his way, the parents only presented the question to their daughters as a remote proposition. They received in response a satisfactory, though not absolutely definite, assurance that the eldest, Alexandra, might perhaps not refuse him. She was a goodnatured and sensible girl, very easy to get on with, though she had a will of her own. It was conceivable that she was perfectly ready to marry Totsky; and if she gave her word, she would keep to it honourably.

"Idiot"ノ中ニ Prince Myshkinガ generalノ妻君ト娘ニ話ヲスル中ニ Dostoevsky 自身ノ 經歷ノ如キ者ヲ挿話トシテ述ベタ條ニ曰ク：——

This man had once been led out with others to the scaffold and a sentence of death was read over him. He was to be shot for a political offence. Twenty moments later

a reprieve was read to them, and they were condemned to another punishment instead.

Yet the interval between those two sentences, twenty minutes or at least a quarter of an hour, he passed in the fullest conviction that he would die in a few minutes. I was always eager to listen when he recalled his sensations at that time, and I often questioned him about it. He remembered it all with extraordinary distinctness and used to say that he never would forget those minutes. Twenty paces from the scaffold, round which soldiers and other people were standing, there were three posts stuck in the ground, as there were several criminals. The three first were led up, bound to the posts, the death-dress (a long white gown) was put on, and white caps were pulled over their eyes so that they should not see the guns; then a company of several soldiers was drawn up against each post. My friend was the eighth on the list, so he had to be one of the third set. The priest went to each in turn with a cross. He had only five minutes more to live. He told me that those five minutes seemed to him an infinite time, a vast wealth; he felt that he had so many lives left in those five minutes that there was no need yet to think of the last moment, so much so that he divided his time up. He set aside time to take leave of his comrades, two minutes for that; then he kept another two minutes to think for the last time; and then a minute to look about him for the last time. He remembered very well having divided his time like

日記

that. He was dying at twenty-seven, strong and healthy. As he took leave of his comrades, he remembered asking one of them a somewhat irrelevant question and being particularly interested in the answer. Then when he had said good-bye, the two minutes came that he had set apart for *thinking* to himself. He knew beforehand what he would think about. He wanted to realise as quickly and clearly as possible how it could be that now he existed and was living and in three minutes he would be *something*—some one or something. But what? Where? He meant to decide all that in those two minutes! Not far off there was a church, and the gilt roof was glittering in the bright sunshine. He remembered that he stared very persistently at that roof and the light flashing from it; he could not tear himself away from the light. It seemed to him that those rays were his new nature and that in three minutes he would somehow melt into them……The uncertainty and feeling of aversion for that new thing which would be and was just coming was awful. But he said that nothing was so dreadful at that time as the continual thought, 'What if I were not to die! What if I could go back to life—what eternity! And it would all be mine! I would turn every minute into an age: I would lose nothing, I would count every minute as it passed, I would not waste one!' He said that this idea turned to such a fury at last that he longed to be shot quickly.

〔九日〕〔月〕の事。御大典の前晩。外出。暗くて雨が降りさうな宵。宿のものが提灯を點けて歩いて行かうといふのを斷つて谷川に沿つて小半丁行つて谷川を離れて右へ折れるとすぐ又元の方角へ轉じて再び谷川を左へ渡らなければならない。其丁度鍵の手の様に折れ曲つてゐる角の旅館の玄關に人立がしてゐる。門を入つて人の後ろから覗き込むと模様のある着物を着た女の子が踊つてゐる。是は上り口の上での所作だから外からも見え〔る〕筈だが小さい兒なので頭に載せた手拭父が見える。三味線と月琴を弾いてゐる男女は我々と同じ地面の上に立つてゐるので却つてよく分る。

見えないからすぐ出る。

「高山彦九郎が何とかして故郷を伏し拜みつて唄つてゐ〔る〕から馬鹿だな。皇居を故郷と間違へてゐやがる……」

「此酒屋の御上さんの妹は別品だから見ろ」

「此所に己の舊知己がゐるから一寸寄つて行かうかな。小鳥を飼ふ仲間だ」

狭い町はすぐ盡きて灯が段々少なくなる。村外れにある鎮守の森へ出る少し前から又橋を渡つて引き返す。

元の旅館の前へ来ると先刻の踊子の連中が丁度仕舞つて門からぞろ／＼出て行く月琴を抱へた女が黒紋付の羽織を着てゐる夜目には縮緬らしく見える、夫から小さい踊子は友染の着物に赤い帯を立矢の字に結んでゐる。最も奇異に感じたのは彼等の一人が提灯をぶら下げてゐる事である。

彼等は其提灯で足元を照らしながら今出て来た旅館の裏手にある橋（川向にある他の旅館へ丈通する細い橋）を渡つて行つた。

○十五日〔日〕 昨日宿の婆さんから食逃の話聞く。一人は来て飯をくふ所其量がどうも多過ぎた。やがて御上さん此所いらに烟草屋はありますまいかと聞く。あとで上さんが亭主に「御前さんあれは慥かに食逃だよ。あとをつけて御覽なさい。見付の松迄行つて歸らなかつたら其儘にして歸つて御出なさい」。一人は知りもしない癖に「旦那今日は」と威勢よく這入つて来た。上さん曰くありや錢なしだよ。二三日後亭主さんに云はれて客の入浴中包をしらべる、果して何にもなし

御幸さんから泥棒の話聞く。日本大學の制帽をかぶる男、菓子を買ふにも散歩するにも悉く大學帽をかぶる。隣の御客さんの話を襖へ耳をつけて聞く。同じ年輩の書生と懇意になる。一所に伊豆山へ行く。友達が二十圓持つて行くといふのをとめて五圓も持つて行けば澤山だといふ。友達はそれを欄間と鴨居の間にある横柱の裏にかくす。それをぬすぬ。宿料を催促すると色々辯解すれどもよこさず遂に追出す

○やせ馬の話。脊中へやせ馬をつけて米俵を二俵背負つた女の話。上さんが男にやせ馬で近所へつれて行かれた話

○十六日〔月〕

一の字峠、金堀瀧

木の名 ツサ、カンバ、

長尾曾根。沼津三島と静岡灣を見る。

鞍懸の眺望。八ヶ國の眺望（青ページヲ見ヨ）

相模武藏安房上總下總信濃甲斐伊豆駿河遠江（青ページより掲出）

十七日〔火〕 朝富士屋を出て湯本へ行く途中車夫の語、――

宮の下の天皇陛下も此春死にました。飛ぶ鳥を落すやうな勢でしたがね。何しろ偉い人で往來を歩くも小供でも何でも御辭儀をするので、「己は頭がかつたるいから」つて仕舞に手を擧げる丈で頭は動しませんでした。それで眞直を見てゐて横目なんぞは使はない癖に誰が何所を通るかちやんと知るんだから偉いもんです。

何しろ西洋人の金でなくつちや取つたやうな気がしません。駕籠を雇つて大地獄迄歩いて行つて少しも乗らずに、それで酒錢を呉れるんですからね。日本人は尻が痛くなつたつて中々下りやしません

奈良屋と富士屋の間には契約があつたんです。日本人は奈良屋で取る其代り西洋人は富士屋で貰ふつてね。それが何でも二三年前に満期になつたんださうで、今ぢや兩方共日本人でも西洋人でも客にします。然し奈良屋へ西洋人は行きませんや。行つても午飯を食ひに富士屋へ来て見てもすぐ移つちまひます。此方はコツクが十五人もゐる所へ持つて来て、向は一人か二人しかゐるな

いんですからね。

大正四年

○湯河原では公曰く

馬鹿囃は六づかしいものだけ。今東京の藝者のうちであれが本當に出来るものは吉原の御貞だけだ。彼はキヤリと馬鹿囃とを混同してゐる。手古舞は御神樂の事と考へてゐるかも知れない

癲癇病ノ心狀 (The Idiotノ中ヨリ)

He remembered among other things that he always had one minute just before the epileptic fit (if it came on while he was awake), when suddenly in the midst of sadness, spiritual darkness and oppression, there seemed at moments a flash of light in his brain, and with extraordinary impetus all his vital forces suddenly began working at their highest tension. The sense of life, the consciousness of self, were multiplied ten times at these moments which passed like a flash of lightning. His mind and his heart were flooded with extraordinary light; all his uneasiness, all his doubts, all his anxieties were relieved at once; they were all merged in a lofty calm, full of serene, harmonious joy and hope. But these moments, these flashes, were only the prelude of that final second (it was never more than a second) with which the fit began. That second was, of course, unendurable. Thinking of that moment later, when he was all right again,

he often said to himself that all these gleams and flashes of the highest sensation of life and self-consciousness, and therefore also of the highest form of existence, were nothing but disease, the interruption of the normal condition; and if so, it was not at all the highest form of being, but on the contrary must be reckoned the lowest.

日記及斷片

——大正四年十二月頃より大正五年七月二十七日まで——

○ブランドス。テイン。主義標題ハ主義標題。個人作家の批評ハ批評。リンクを缺く。

○軍國主義論、軍國主義ハ方便、目的ニアラズ故に時勢遅れなり

獨乙の「力」の考と佛蘭西の「力」の考

○甲でもあり乙でもある。執着もあり執着なくもある。論理的でない。然し論理は果して事實か。謡曲を習ふ例。

○人から遠慮される様な地位にあるものは啓發を受くる機會なし。体裁のいゝ事をいふものばかりを相手にして満足してゐる。夫故此満足を打破する者が出て來るときは、自然前者を同情者もしくは味方として見る。さうして後者の方が間違つてゐるのだと推定する。その方が自然だからである。もし前者が誠實な贊同者である場合には夫でもよろしけれど、虚偽の場合には此位地を有する人程氣の毒なものなし。

日記及斷片

○箒庵の茶會記事。其道に入ると何事によらず天下他事なき有様なり

○獨乙の繪畫（ハ思想ナリ）

○トライチケ

- 科學的一元説(テイン)トベルグソン
- 象徴主義(グールモンの與へたる)ノ定義
- 老人雜話。佛蘭西ノ捕虜物語
- アナトールフランスの

○歐洲戰爭 宗教、社會主義、經濟、人道、皆國家主義に勝つ能はず

○田中君の話

酒。コンニヤクの上等が第一

ブランデーは年數、香りと味

葡萄酒も年數

然し年數が同じならば vintage

杖。ピカーチリーの傍セントジエームのブリッグス。籐(製セザル者) 四百圓

食物。天麩羅、花長、魚河岸の屋臺見世を料理屋へ呼ぶ、

越後屋の菓子(八百善、常磐屋の注文)。池の端の塩煎餅。黒砂糖の羊羹 横町の太平

堂。黒砂糖の飴、赤坂のチマキ屋(注文のみ)。

茶。ブラツクチーとウーロンを交ぜる。キューブの砂糖の味。

毛皮。シルバーフォックス、總毛一萬圓、六千圓。ラッコの皮少しづつ、白い毛が生へたのを貴

布。長さ一寸五分。襟皮七八百圓。帽子、三四百圓。自動車へ乗る連中の着るもの
衣服。門平を作る。羽織の長きは無用。袴腰改良。心へ紙上に帯心を捲く。洋服の改良

湯河原

一月二十八日〔木〕(行)より二月十六日〔火〕(歸)

○宿の老上さんの話

△男ある素人の情人をつれてくる。同じく關係のある女(待合の女將)あとから来る。男風呂場で女將につらまつて出る事が出来ず湯氣にあがる。上さんに救はれて部屋に歸る。素人の女の方は泣いて東京へ歸るといふ。上さんなだめて戸棚の中へ布團を敷き火鉢を入れてかくす。さうして男と女將をたしなめる。もう騒動をしないといふ言質をとる。それから男一人に女二人同居す。男風呂に入る。二人とも遠慮してどつちも湯に追^原いて行かず。男コボシテ曰クリヨマチで手拭が絞れないのに二人とも一所に来てくれなくつちや仕様がなない。

△男あり横濱の藝者と深い仲なり。單身湯治に来る。別口の新橋の好きな藝者を呼ぶ。すると其藝者の来る前に横濱の方が勝手に来てしまふ。呼ばれた方はあとから来て指を銜へて二人を遠方から見えてゐる。

○小三さん婆さんの話。

私は十五のとき紀州熊野から親につれられて大阪へ出ましたがあした食ふものもないやうに零落してしまつたのです。父は千人前の法華寺の坊さんと懇意なので其所へ入ればどうかなると云ひますが母や妹の始末が出来ないので。それで堀江の眞暗ないやな家へ五年百圓の約束で行く事になりました。所が其所の家では又私を讀岐の志度といふ所へ轉買してしまつたのです。私は親の手へ百兩の金が渡つた事とのみ思つてゐますと、母が妹を脊中へおぶつて志度迄遣つて來ました。驚ろいて聽いて見ると其百兩を一どきには呉れないでちび／＼渡すので何うする事も出来ないのださうです。母が漸く國へ歸ると材木屋の旦那方が御米も可愛さうだからどうかして遣つたらよからうといふので百圓持たして迎ひに寄こして呉れました。それが十七の暮で(明治五年)す。夫から宅へ歸つてから一人で東京へ出て來ました。「石の上にも三年」といふ言葉が私に刺戟を興へたのです。東京へ出て材木屋さんの關係から木場へ一寸落ち付きました。夫から霞町へ來て口をさがしましたが何處でも相手にしません。漸く一軒まあためしに置いて見やうといふのがありましたが其所へ這入つて見ると苦しいものでした。朝は下女と一所に起きて拭掃除をさせられます。御茶を挽くと御午御飯は焼芋より外に於てがはれないのです。焼芋は一錢分で六本しかありません。それに悪い男の子がゐて其焼芋を横取りしてしまふのです。悪くすると二本位で我慢しなければなりません。さうして夕御飯は御座敷へ出て食べられませんが歸つても食べられないのです。稽古は姉さんがして呉れますが、ひどい目に逢ひます。三味線の撥で手の甲を打たれるので手が腫れてどうする事も出来なかつた事があり

ます(北州を教つた時)。言葉が通じないので手水場に入つて言葉の稽古をしました。御座敷へ出て二十五座を遣れと云はれてそんな段物は知りませんと斷つて小便藝者と云はれた事があります。二十五座といふのは段物でも何でもないので。△「一人寐る夜は二人が淋し二人見る夢一人ごと」此文句の解釋が二通りあるんですよ。○豊田のばあ曰く昔は足を氣にしたものです。枋の木炭ばかり遣つて、親指の爪を深くとつて、それで素足へ齒のある下駄を穿くのです。

○眞鶴行

門川迄あるく。田舎道で荷を肩にした肴屋ニ會フ。「旦那方はどちらへ御出です。」「眞鶴ですか。なにさう遠くはありません。あの無線電信の柱が見えるでせう。あの山の向ふ側になります。」(右の方に海に突き出てゐる岡を指して)

「好い所かへ」

「え、揚屋が十軒あります」

「外に何にもないかね」

「もう少し早いとブリ網が見られるでせう」(時に十一時頃)

門川の茶屋に小さん、豊田の婆さん、榮ちやんといふ女が待ち合せてゐた。

茶店の女主人に「御上さん、鶯が眞鶴に預けてあると云つたつけね。今日是从眞鶴へ行くから序に見せて貰はうと思ふが平井屋にゐるのかい。」(眞鶴の宿屋)

「へえ平井屋で近藤の篤と仰しやれば解ります」

榮ちやんが来て赤切符を渡してくれる。黙つて受取つて、ぞろ／＼輕便に乗る。(並等に)一杯なので手を出してつり皮をぶら下げる横に渡した棒につらまる。豊田の婆さんが下から仰いで見て腕が寒いでせうと云つてシヤツの端を引張る。生憎半そでなのでシヤツは少しも袖口の方に出て来ない。

吉濱でとまる。右はすぐ海、海の岸は石垣で築いてある。左手は小學校、前に廣場、それから山路へうねつて這入る。先刻右の山の上に見えた無線電信の柱が山に遮ぎられて見えなくなる。一山超えた所で「輕便」を降りる。眞鶴へ行くのはすぐ右に折れて田舎道のやうな所を通つて行くのである。何所にも眞鶴らしい影も見えない。

「此様子ぢや是から半道もあるんだらう」

此時吾々を足早に追ひ越して行つた男が急に振り返つた。

「そんなにありやしません。五丁です」

彼の言葉は鋭どかつた。

「眞鶴が遠いといつたつて、里程を間違たつて何もさう拳突を食はさなくつてもよささうなものだ」と田中君が驚いたやうにいふ。

右は雑木林で小高くなつてゐる。下は二三間の切岸で下は畠である。日影になつてゐる田舎路は霜どけでぐちや／＼する。女連は弱らせられる。中村が豊田のばあさんの手提籠を持つてやる。田中が小さんに杖を貸してやる。キルクの草履を穿いてゐる榮ちやんは尤も手古摺つてゐる。

「跣足になれ」

「負ぶつてやれ」

「よござんすよ」

榮ちやんは斷乎としてゐる。

「早く先へ行つて宿屋から迎を寄こしてやるがい」

男はどん／＼歩いた。

道が忽ち盡きて坂になつた。それを曲つて又下りると人家がちらほら見えた。又曲ると今度は

石段になつた。

「平井屋といふ宿屋は何所かね」

荒くれた漁師風の爺さん、

「すつと云つて右側だ。前がトタンで後ろが藁葺だ」

平井屋の二階へ通る。

七面鳥が菜を食つてゐる。鶏が餌をつゝいてゐる。やがて向ふの垣根の處に白い兎が顔を出した。

「午餐を食ふ何が出来るかね」

「バシヨ一烏賊にホウボ一のやうなものです」

「ホーボ一を酒と醬油で煮てくれ。それから烏賊の刺身をおれ文食ふから持つて来い」

「へい」

「おいまだあるよ。先刻途中で見たら鯛が店先にあつたが、宅にもあるんだらう」

「へい御座います」

「あれを生を儘持つて来い。此所で焼いて食ふんだから」
飯の支度の出来る間濱へ出て見る。狭い道にはみんな石が敷いてある。その道がみんな濱の方へ急な勾配が着いてゐる。さう「し」て不規則に幾筋もある。それからそれを横に貫いてゐるものもある。悉く石丈で疊んである。路丈は何だか以太利邊の小さな漁村にでも来たやうな心持である。(家は無論比較しやうがないが) 芝居の廣告のピラが路傍に貼つてある。「こんな所にも何々座といふものがあるのかね」

少し行くと右側に蕎麥と看板を懸けた生新らしい粗末な家の中で二三人の女の高い笑ひ聲がする。

濱は三方陸で馬蹄がたに水が食ひ込んでゐる。靜かな小さん灣で僅か餘された一方の砂地に引き上げられた船が並んでゐる。水面は強い色をしてゐたが鏡のやうに穩かであつた。右手の山の頂上に先刻の無線電信の柱が見える。

「あれは海軍のだらう」先刻思ひがけなく狭い路で水兵に四五人擦れ違つた

宿へ歸つて飯を食ふ。中村はもう一人で鯛を大分焼いて骨を皿の上に並べてゐる。小さんが「此鯛は生で食べるべきものだ。さうして骨も食はなくつちや本當でない」といつて、下女に井に醋を一杯もらつて其中に鯛を浮かして、それをむしや〜食ひ始めた。(彼女はそれがために其晩嘔いたり下したりしたさうである)

「是からブリ網を見に行くんだ。婆さん連も一所に行きなさい」

婆さん連は最後の輕便で東京へ歸る事になつてゐた。

「時間に間に合ふでせうか」

「間に合ふとも」

婆さん連は懸念しながらもブリ網が見に行きたいので一所になつて又濱へ出る。

莫菴と座布團を持つて来た宿の下女も二人船に乗せる。我々は外套の襟を立て、陣どる。風はなく海は平かだが時節が時節だから寒い。右手に石山がある。

「あれは淺野さんの持つてる所です」

「あの泥棒が持つてるんぢや碌な事はねえだらう」

「何でもあすこを石垣にしてやるといふ約束で此土地のものも承知して賣つたんですが、一向石垣なんかつきさうもないです」

「あいつの事だから石を切り出して儲ける氣なんだらう」

山のはづれ迄船が来た。すると大きな海面に丸太を浮かしたやうな目標だか浮きだかどつと並んで見える。それは規則正しく間隔を置いてある恰形に排列されてゐるにも拘はらず其恰形の何であるかは素人眼には一寸分らない。どこから何う始つて何處で終つてゐるか分らない。其丸太の上に鳥が澤山留つてゐる。灰色のやうな薄茶けたやうな色をしてゐる。

「何だね」

「鷗さ」

「はあ 何だか恰好が違ふがな」

「沖の鷗だから、海のと隅田川邊のとは違ふさ。」

其うち鳥は低く飛んだ。

「成程あゝして飛ぶ所を見てゐると如何にも鷗だ」

沖には船が澤山見える。

「凡て十一艘居ます。あれで十四五人宛乗つてゐるんですから。惣勢は二百人近くです。大漁の時は七萬位ブリがかゝる「の」ですから、まあ十萬圓近くの金になるんです。一人が一晩に二十とか三十とかいふ金を懐に入れますがそれをみんな飲んちまいます」

「それで揚屋が必要なんだね」

船はある間隔を置いて浮いてゐる例の丸太のやうなもの、一列に並んでゐる傍を通り抜けて遙かに見えた漁船の一つについた。船には苦が片側に懸けてある其中から顔を出した漁夫が二三人吾々の船の女を見て何とか聲高に罵つた。宿の女は笑つてゐる。やがて船が苦の向側へつくと十四五人がごちや／＼になつて固まつてゐたが起き返るもの立つもの、立つて又寐るもの、雑然として吾々の船を見てみな新たに活動し始めた。

「何時頃から網は引くんですかね」

「まあ四時頃からです」

時に三時半頃。答へたのは恰腹の好い立派な男である。

「歌右衛門に似てゐるよあの人は。いゝ男だ事」と豊田の婆さんは感心してしきりに歌右衛門

といふ言葉を振り舞はす。此歌右衛門は四十代の立派な男である。「私が司令長官です」と云つた。五分刈の頭に後ろ鉢巻をしてゐた。

「網は日に大抵四回やります。漁業期は十二月から六月位迄です。小田原の鈴木持網です。網の價は壹萬六七千圓位でせう」

向ふの船に櫓があつて其上に人が一人立つてゐる。

「あれは見張りですか」

「えゝ魚が寄つてくるとあすこで大きな聲を出してみんなに知らせるのです」

「知らせる迄は取り掛らないんですか」

「なに時間が来れば遣ります。疲れてみんなが寐ますからな。大きな聲を出して知らせる必要がありません」

「さうして君が司令長官だとすると、みんな此所へ寄つて来る譯かね」

「いえ手前は司令長官ですが元船はあすこにゐます」

大きな網は元船へ手繰り寄せられるのである。

「あすこへ行つて乗せて貰ひませう」

船頭は船を元船へ着けた。

「うちの御客さんだ少し乗せて見せて御呉れよ」

我々は苦の陰に一團となつて遣入つた。氣持がよくないので黙つてゐた。眼をねむつてゐた。動く船と波を見ると氣持が悪くなる。

爐が切つてあつてそこへ誰かが横を横縦に十本ばかり渡した横は燃える前に燻ぶつた。けむい煙が我々の眼や口を襲つて來た。やがて巧みに並べられた横は赤い燻を吐き出した。へさきに近い所にヘツツイガあつて一抱えもある釜が掛つてゐた。其前に黒焦に焦げてびか／＼した鯛が串に刺した儘二本立てゝあつた。呪符か食ふものか解らなかつた。

みんな飯を食ひ出した。

やがて網引は始まつた。元船から見ると其「を」扇の要として末廣に十一二艘の船が丸く何時の間にか陣を張つてゐた。やがて素裸になつた漁子が舷に胸をあてがつて手を水際から揚げたり下げたりし始めた。一艘に十人と見て百二三十人の兩手だから二百四五十本の手が人形の様になり水から離れたりついたたりする。同時に彼等のこゝんだ脊(赤銅色の)と黒い頭とが手とともに「に」人形の様な運動を始めた。凡てが調子づいて、さうして其調子を保つため、(又それが原因になつて)一種の掛聲が遠くから起つた。掛聲は時計の振子の様に雑音ではあるが規則正しく續いた。彼等は胸を舷側に着けて水際近く下ろした頭を舷と同じ高さ迄上げる。さうして又其頭を水際近く下す。同時に手に持つた網の目を此運動の調子につれて一度ごとに手繰り寄せる。あゝからだの重みを船縁に靠たせて何うして胸が擦り割けないのだらう。又あゝ眼まぐるしく頭を動かして眩暈が起らないのだらう。

人形のやうな運動は勇ましい掛聲と共に段々元船に近寄つてくる。彼等は一つ掴んだ網の眼を投げると同時に其先の眼をつかまへ、次には又其元を掴へるといつた風に段々元船に近寄つて仕舞には十艘の船では形ちづくれない程の小さな輪になつてしまふと、一艘、二艘、列から外

に離れて行くとう／＼六七艘の船で完全に取圍まれた輪になる時分には網の底はもう水とすれすれになる。網中の魚は船の中へ掬ひ上げられる、ブリは何時見えるかと思つて見てゐたが中々見えない。しまいに青い棒のやうなものが籃の中を横切つた。

不漁で三尾しか取れなかつた。

「おれは飯を食つたが、あはどうする」

船の中でこんな事を云つた船頭がある。

宿屋に着くもう東京へは間に合はないといふので婆さんは又湯河原へ引返す。大風。宿のものが提灯をつけて案内する。提灯は消える。掛茶「居」の薄暗い灯の下で輕便を待ち合せる。

……

「あの元船へ移る時ね、船頭が誰か身體の汚れてゐるものはゐまいなといつた時、私やぎよつとしました。菜ちやんが若しきゝやしまいかと思つて。あゝいふ縁起を祝ふ稼業ですからね」身體の汚れてゐた菜ちやんは蒼い顔をして其時船の中に寐てゐた。船頭の言葉を聞いたか聴かなかつたか、それは誰も知らなかつた。又後になつても訊ねなかつた。何しろブリは三尾しか捕れなかつた。

贅澤

(一)藝術上。

漸々氣六づかしくなる。始め眼を喜ばせたものが仕舞には少しも藝術的に訴へな

くなる。それが高じると本當に好いと思ふものは眞に僅かになる。人は之を稱して向上といひ當人も夫で得意である。

(二)物質上。藝術の場合と同じ。然し人は之をよく云はず。當人も成るべく之を隠さうとする。「足る事を知れや田螺のわび住居」

(三)人間の好悪の上、是も同じ事。さうして評價は(二)と同じ

(四)精神的、俗にいふ氣六づかしい事、是も二の場合と同じ

此四つは論理から云へば皆「同じ」方向に向つて評價されべきものなるに、かく反するは第二(三)は道德的意義に解釋さるゝが第一と反對になるなり。道德的とは相手に迷惑を及ぼすといふが一つ。自己に安心なきが故といふ意味二つなり。然るに自己に安心なしと云へば藝術の場合も同じかるべし故に此場合は自己「に」安心なき程よきものを人に給與するが故によしと見ざるべからず(藝術的向上心に道義的評價を附着すれば)。もしくは自己の安心を犠牲にしてヨリ好きものを握まんとあせる慾望を肯定すると見ざるべからず。(此場合は如何に自分が向上したればとて他に害を及ぼさず迷惑をかけざる故凡て自己本位にて差支なしと見做され居るなり)

○物を観る時間と好悪の變化

第一印象の時 大變好く

漸々

刺戟がなくなると平凡に見える

最後に厭きる

○私はKさんと同じ食卓で御飯を食べました。Mさんとは違つた食卓です。もと／＼Mさんと一所に行つたのぢやないんですからね。それで何うしたといふのです。Kさんとは親しいがMさんとは親しくないといふんですか。親しくないんぢやない知らないんです。向ひ合つて話してさへゐれば貴方は親しいと思ふんでせう。然し身體は離れてゐても口は利かなくつても親しいものはあります。心は距離で隔てる譯には行きません。どんな遠い所へでも行けます。口を利かないでも思ふ通りの話が出来ます。

○○○○子の話

私は下野眞岡のもので御座います。家は荒物業であります。其日に困る程の經濟狀態では御座いません。兄弟は十三人で大變大勢ですが父が非常に子煩惱でそれがため私が他を欺かなくてはならない羽目に陥つて弱つて居ります。

私は宇都の宮の女學校の専修科に居りました。其頃私の母方の從兄に當る子供が同じ土地の中學に居りました。これはもと眞岡の中學に居りましたが卒業する時にある事故から免狀を取る譯に行かなかつたので宇都の宮の方へ轉學したのです。海軍志望なのでどうしても中學を卒業して置かないと免狀がもらへないために轉學の必要もあつたのです。

其男の姓は○○と申します。此○○は眞岡に居る時は私の宅から中學へ通つてゐたので私の兄弟及び私などは兄弟のやうにして暮らしてゐました親しいものですが、宇都の宮に居る頃不圖私に戀を打ち明けて妻にもらひたいといふ事を申し出しました。私は驚ろきましたが其頃既に十七

歳にもなつて居りまので少しは思慮も御座いましたから其問題について考へました所、先方の父と私の父とは到底性質が一致致しませんから是は先へ行つて行くまいと思ひまして其旨を當人に答へました。

然し私は其人を立派な人格の人だと信じて少しも疑つて居りませんでした。

其後〇〇は海軍の試験に及第して少尉になりました。それから私の叔母を通して私を貰ひたいといふ旨を通じました。私は異存が御座いませんでした。父母も承知を致しました。それで婚約が成立致しました。否もう結婚するといふ事に迄話が進んで來ました。

すると〇〇が叔母に向つて結婚する前是非一度私と二人きりで會見したいと申し込んで來ました。叔母はそれは責任があるからと申して断りました。然し〇〇は既に貰ひ受けた女「な」のだから二人きりで會つた所で決して不都合のある筈はないと主張しました。それで叔母も已むなく都合して私と〇〇とを私の家の二階で會見させる事にしました。

然るに私を驚ろかせたのは其時の彼の態度です。〇〇は私に向つて何にも申しません。たゞ黙つてゐるのです。それから口へ出した僅かばかりの言葉は又私を驚ろかせたのみならず却つて私を不審がらせました。又私を不快にしました。彼は私に向つて斯う云ひました。

「〇ちゃん私は私などの所へくるよりもつと立派な人の所へ行つた方が好くはないか」

〇〇の立派な男といふのは私の親戚にあたるある文學士の事をいふのであります。自分で是非私を貰ひたいと申し出して置きながら、さうして自分の云ふ通り私をもらふといふ事に話を極めて置きながら、會見の時にあたつて、斯んな言葉を未來の夫から聽かされやう「と」は私も夢にも

思ひ掛けませんでした。

彼はさういふ不得要領な態度で座を立ちました。夫から東京へ來て一寸自分の宅へ寄つたなりすぐ自分の勤務先の奥へ向つて立つてしまつたのです。さうして夫からといふものは結婚についてどういふ考なのか一向歩を進めてくれないのです。

それが何の爲だか解らないのです。然し〇〇家の一家の事情は其後になつて私達によく知れました。彼の父は養蠶を業としてゐたものですが性來頗る善人で利害を眼中に置かないやうな性格であつたのでとうとう破産してしまひました。故郷にゐる譯にも行かず東京へ出たのであります。で其一家は〇〇の兄が引受けなければならなくなりました。所が此兄は砲兵中尉で既に自分の家族があるので、とても薄給でさう多勢の世話をする譯には行かないので、自然借金が出來ました。仕舞に已を得ず弟の名義で玉突場を経営し出しました。所がそれが當局者間の問題になつて軍人として商業に従事するのは不都合だから何方か已めると其筋から注意されたのであります。そこで兄は此苦境を免かれるために弟に私と結婚して其家を救つて呉れと云つたのです。〇〇は怒りました。金の爲に結婚を強ひるなんて甚だしい侮辱だと云つて喧嘩をしたさうです。然し彼は兵學校在學中から始終兄の世話になつてばかりゐて家のためには何も盡して居らるので自分も心苦しかつたのです。

で愈兄が辭職するかしないかといふ期限の三日前になつて、彼は兄に向つて其位の金はいくら自分だつて出來ない事はないと意地づくで兄に明言してそれで私に會ひに來たのださうです。所がどうしても私にはそれが云ひ出せなかつたものと見えて黙つてゐたものと思はれます。彼は同

じ町内の知人に逐「二」の顛末を話したさうです。其人は旨を領して宅へ來ましたが生憎父が不在だつたので兄に話をしなければならなかつたのです。すると兄はたゞの好意で普通の依頼と心得て好い加減にあらつて返してしまひました。

そんな事で私の婚姻は破れる。私は多勢の兄弟の間に居つて父母に心配をかけるのが辛くなりました。(兄は嫁を迎へなければなりません)そこで横須賀の叔母をたよつてしばらく身を寄せた。此叔母は女醫です。すると驚ろいたのは〇〇が何時の間にか横須賀(御大典後)詰になつて、ひよつくり叔母の宅へ訪問て來た事です。彼は私を見て今迄の事件に就いては何も云ひませんでした。碌々話す機會もなかつたのです。家には看護婦だの下女だのが大勢居ますが私と〇〇との關係に就いて委細を知つてゐるものは一人もありませんたゞ兄弟のやうな間柄とのみ取つてゐるやうでした。

其うち〇〇の様子が變になりました。一人で黙り込んで外套などを被つて診察室の隅に寐てゐたりします。夫から今度松山から女房を買ふ事になつた杯と云ひふらす許りか、女の寫眞を看護婦などに見せるやうになりました。或時は其寫眞さへ其所いらへ載せて置いたり何かしました。私は最初から〇〇を信じてゐました。他から馬鹿と云はれても何でも其人を疑ふ事が出来なかつたのです。然しこんな事實を眼前に見るとどうしても疑はずにはゐられなくなります。私の知つた人で若いうちに過を犯して今はたゞ一人八つになる子供を育て、暮してゐる人があります。其人は今三十二ばかりですが六つ年下の男と關係をつけて、男は高等商業を卒業して満鐵へ奉職したがり何うしても一所になると云はないのです。その女の人が自分の經驗から推してせう、

私に「あなたはあの人のあれ程踏み付けられて口惜しくも何とも思はないのですか」と云ひます、私は口惜しがる前に果して男がさう輕薄だつたのかを是非確めなければならぬのです。他から見れて明白な事實と見えるかも知れませんが私は一旦信じた事をどうしてもさうでないと思ひ込む譯に行かないのです。そんな筈がないとばかり思へてならないのです。〇〇は此女の人に手紙をやつた事があります。其手紙にはこんな意味が書いてあるのです。

「私は是非結婚をしなければならなくなつた……」

手紙は女から私に内覽するやうにと云つて送つて來ました。私に見せては好くあるまいと思ふが又私に決心させる手よりにもなるからと云つて女はわざ／＼其手紙を私に送つて呉れたのです。私は男が何故そんな事を女に云つてやつたものだらうかと疑ふのです。實際私が厭になつたのか、夫とも私に早くあきらめさせてほかへ嫁に行かせやうと思ふのですか。それが私に判斷がつかないのです。

女は又〇〇と私の事に就いて話し合つた事もあるのです。

「〇ちゃん程立派な女はゐないと思ひます」

「そんなら何故其〇ちゃんを御貰ひなさらないのです」

「私は貰ふ價值がないのです。私はやくざな人間ですから」

此會話が果して彼の本意を語つたものでせうか。彼の本意ならば彼の其後の舉動はどう解釋して好いものでせうか。私は煩悶しました。叔母は私を引受けて相當の所へ縁づけるから心配するなと受合つて呉れます。然し私の様子を見て餘程心配になると見えて父に手紙を出しました。

「○ちゃんの事は引き受ける積りだが當人が今のやうに圓覺寺へ行きたいの何のと普通でない事をいふやうでは困るから」

父は私を見て泣きました。どうか今から又何か勉強を始めるとか何とか云はずに大人しくして叔母さんや御父さんのいふ通りになつてくれと云ひます。

私は承知致しました。私は必竟他に期待があるからこんな煩悶をするのだから、此期待を打棄て、しまはうと決心しました。それで當人の事はもう考へまいと思ひました。然し叔母の勧めで横須賀邊の人へ嫁くとなると、矢張り○の顔を見なければならぬので、夫を思ふと殆んど耐へられない氣がするのです。よしそれを忍んで良縁を求めたとしても、今迄の事を黙つてゐなくては結婚が成立しないから黙つてゐると父から云はれます。私は又人を欺つて嫁に行くのがつらくてならないのです。

○ある藝術家ノ述懐として小説中に出す

- (1) 刺戟ガ強烈ナルコト
- (2) 實生活ノ反映としてウンザリスルコト
- (3) 心に餘裕ガナキコト、従つて不安ナルコト
- (4) 俗ツボイ事

夫で自由、安穩、平和を求める、——繪畫は一番それに近い。ドラマチックな繪畫は（人情ガカツタ）成功スルものが少ナい。其理由は不明ナレドモ脚本や小説の本質を冒スカラジヤナイダ

ラウカ、吾人は繪を別の方面カラ眺めるからぢやないだらうか。畫の本質を全然異つた所に置く爲ぢやないだらうか。（カラクテリスチックを表現する現代的繪畫ノあるものは如何といふ質問も起つてくるが）。然ラバ其畫の本質とは何ぞやと云はれると困る。

つまり生活に飽いたものが田舎へ引き込むのと同じで、自然、と人間（傍觀的態度で見ると無關心で賞翫する）を愛するといふ氣分が取も直さず繪を愛する氣分ぢやないだらうか。

所が小説や脚本の藝術の強烈サニ辟易して繪に逃れるとすると其所に又人間臭いやな所が出てくる。人に賞められたくなる。人と競争したくなる。仕事それ自身は平穩な刺戟を持つてゐるが其仕事と世間との交渉になると矢張り俗ボクツテ煩ハシクツテゴタ／＼してゐて、塵埃ダラケデ仕方ガナイ

○AとBの關係。寧ろ愛より愛の形式、靈より寧ろ肉

AとCとの關係。歴史的には前者よりは遙かに淺し。外部より見ればスライト、アクエインタンス。然し内部にインスタントニアスラスト

(A+B)の關係は外面的に非常に近し然し(A+C)の關係は内面的に却つて近し

此時Bより觀察せる(A+C)の關係。

或時はハツと驚ろく。さうして大變だと思ふ。或時は推察がすぐ事實と同じものになつて嫉妬心を起す。或時は推察の眞か偽かを疑つてたゞ不審の念を起す。或る時はたゞの否定に傾く。

○慣れぬ仲間の前へ出た時

(一) 神經質の人の恐怖
(二) 場慣れない人の恐怖

○二人の友達が久し振に會ふ。昔し會つた舊友の事などを話しあふ。「あいつは何うした」。會遊の事を話しあふ。「あの時は何うだった」

○プレートニツク ラツヴ。

A、僕はあるの女に對してたゞプレートニツクラツヴを有つてゐる丈だ

B、皮肉ナ笑ひ方をする。BハAの内々で道樂をする事を知つてゐるので。

Aはそれに氣が付いたか付かないか頻りに前言を強調する

B最後に自分の腹のなかにある事を打ち明けて、「いくら君が左様綺麗な事を口先で云つたつて、信用が出来ない」といふ

B自己を説明する。彼はその女丈に對して肉感を起さないのだといふ。さうして他の女に對して肉の感じを起しても、ある一人の女(非常に自分の愛してゐる)に對してのみは全く其欲から獨立したものだといふ事を説明する

○己の顔は動物さへ見る顔だ

○「愛はハシカの様なものだと誰か云つてましたね。つまり一度は誰でも罹らなければ濟まないのせう」

「ハシカなら一度こつきりで濟むけれども愛はさうはいきません。二度でも三度でも罹ります

からね。Kなぞは私の知つてる丈でももう五六遍遣つてますよ」

「まあ氣の多い事。然し本當の戀は一生に一度しかないんぢやないでせうか。私の知つた人に好きな人と一所になれない爲に獨身でゐる人があります」

「そんなのは當世向ぢやないんでせう。現代は固定を忌むんだから」

「さうすると貴方も一度や二度ぢや濟まなかつた組ね」

「何うして」

「だつてアナタの主張がさうだからよ」

「主張ぢやないわ。全くさういふ人があるんですもの」

「然しあなたはその一人ぢやないといふの」

「どうですか。自分がさうでなくつたつて、其人の腹は理解出来るぢやありませんか」

「理解出来る丈がさういふ人に近い證據よ。」

「とうとう浮氣ものにされてしまつた」

○細君賣淫の話

「私はそれをKから聴きました。それからといふものはどうしても女を信する事が出来なくなりました。」

芝居を見るレーデーが役者を買ふ話

「私はそれをHから聞きました。それからといふものは矢張り女を信する氣になれません

○人はあるものを白だとも云へます黒だとも云へます。しかも少しも自分を偽る事なしに。是は白と黒との両方が腹のうちに潜伏してゐて、白といふ時は白の立場から、又黒といふ時は黒の立場から一つものを眺めて説明するからです。丁實なものです。

Perfect innocence and perfect hypocrisy

○ボセツシヨ

「私はいくら女を戀しても一直線に其方へ進む譯に行かないのです」

「何故」

「女が自分で自分を所有してゐないと思ふからです」

「ぢや女は誰が所有してゐます」

「既婚の女は無論夫の所有でせう。少くとも夫はさう認めてゐるでせう」

「さうです」

「未婚の處女は両親の所有でせう。少くとも父母はさう認めてゐるでせう。父母「の」許諾がなくて嫁に行く女はまあないからです」

○肛門 プレートニツクラツヴの條と連結す

○Aといふ女とBといふ男

A、Bのインヂフェレントな態度を飽き足ラズ思ふ。又は其愛情を疑ふ。Cとフラーテーシヨ

ンをやる。(Bに氣が付くやうに。) B嫉妬を起す。怒る。喧嘩。A猶Bをぢらす。Bも亦對抗策としてDといふ女とじやれる。Aこれをかんづく。そして今度は自分が嫉妬を起。口説。喧嘩。A、Bに本心を打ち明ける。同時に too late であつた事をも打ち明ける。

○Aの家の面會日は火曜。ある晩Bノ宅から雨が降つたので下駄を持つてくる。Bは宅を出る時Aの所へ行くと云つて出たのださうである。

同じ火曜のある晩。Cが来る。此晩Aは旅行して不在。Cつまらないものだから歸りにBの家に寄る。

「今Aの所へ行つたら旅行で留守でしたから來ました」

Bの妻君變な顔をして曰く「良人もAの所へ行くと云つて出たのですよ」

「でもBさんはAの所にやゐませんでしたよ。Aは旅行で不在なのですから」

「へえ」

○一日の新聞(大正五年三月十八日「金」)

電報。 廣西獨立宣言(上海特電)

獨乙海相交迭(ロイテル)

×經濟會議參列者を阪谷芳郎男にきめたといふ事。阪谷男の意見。歐洲戰爭の經濟状態に及ぼす影響につき。一年二年の間に千億の軍費を要するが如き經濟上の大事件を適當に始末する

ため救済善後策の必要あり。それから敵國苛めの案件もあり。

×英艦が日本の商船を頻々臨検する事につき解決如何、(我國は法律上の)……
以上箱中にあり。

通讀すると一項から一項へ心が段々變つて行く。讀了の後 はあ心が色々の經驗をしたなと思ふさうして其經驗に切目がなくてさうして變化が多い。變化の多い事といつたら考へると大變なものである。此繼目のない多大の變化を経過した心は「是で何分かゝつたらう」と思ふ。

○坊主のすしの記事。澁柿にあり

○三月十六日 柘榴の盆栽をもらふ。カレ枝から青い葉が見不看の程度で出てゐる。それを縁側へ置くと日々すん／＼青味がのびて行く。

○ Stiffness—rigidity

Pliability maleability^{sic} } adaptability

Liquidity

Gaseousness

} degree

人ノ conversation ノ topic ニスグ同化シタリ、人の勸誘デスグ散歩スル氣ニナツタリ。自己ノ流動的態度

○トルストイのアンナの中のレギン草を刈る處(一生懸命になると)無心になる時あり。鎌に精神

があつて一人手^原に動くやうに思はれる

○公平、冷靜、正直、落付、アル處置、然し如何にその殘酷なるかの場合

○心中の心理

「生きてゐると故障があつて一所になれないため死んで一所になりたいといふ意味でせうか」

「すると死ねば一所になれるといふ信念か、哲學が何處かになくはならないでせう」

「えゝ、さうすると矢張り只苦痛を回避するためでせうか」

○Aある事を思ひて其事を實現せずにある。他日他に向つて辯解シテ曰ク「そんな事を考へた事はない」彼は實行せざる以上は考へないと同様と考へてゐる。少くとも他に對して是が立派な辯解になつてゐると考へてゐる。さうして少しも苦痛を感じてゐない。

○畜生と思つてある仕事にとりかゝる。其畜生と思ふ心が取り付いてどうしても其仕事に一生懸命になれぬ。自分では是程一生懸命にならうとするのにとつく／＼口惜しくなる。他に罵しられたがため成功したとか激勵を受けて業をなしたとかいふのは此心理からいふとみんな嘘の事である。それにはまだ他に原因があるのだらう。それを研究せずして無暗に人を叱れば奮發すると思つたり辱めればえらくなつたりすると思ふのは愚である。

○コンシート

人に目遣ひをしたり乙な様子を見せたりしておれにチャームされたらう、おれは色女だらうといふ風をするものは、その目遣や様子に動かされる男を己惚者と云つて笑ふ。然し自分の己惚は全く棚に上げてゐる。

○臆病

人が自分を馬鹿にしやしないか、愚弄しないかと思つて始終不安の態度でゐるものは餘程の臆病ものか、又は癖みものである。

然しある人は斯う云つた。――

「己は臆病かも知れない。鷹揚でないかも知れない。然し正しいのだ。正しいものとして正しくないものを打ち倒さうとするのだ。故なく他を損ふものを嫉むから、そんなものはどうして「も」打ち懲らさなければならぬといふ氣がむら／＼と湧いて出て、この己を不安にするのである。己の落付のないのは巡查や探偵が眼を皿のやうにして良民を害する悪者を捕へやうと一生懸命に氣を遣つてゐるやうなものだ。

○甲其妻の云ふ事を聞かず。乙といふ婦人のいふ事を聞く。妻事あれば乙に頼む。妻は乙を徳とすれども同時に彼女に對して嫉妬の念を禁ずる能はず。

○亭主何事に限らず妻に干渉す。衣服、外出、立居振舞悉く批評の材料となる。ことに嫉妬の氣味あり。妻之を厭ふ。人に逢ふ度に苦情を洩らす。後亭主の態度俄然豹變す。妻に對して全く自

由放任となる。妻却つて喜ばず物足らぬ思をなす。

○結婚後少し新味を失つた夫外へ出てある他の婦人と逢ふ。其特色は悉く自分の細君の有つてゐないもので悉く細君の夫等よりは上等な様に思つて宅へ歸る。細君は夫の爲に化粧して服装迄注意して夫を迎へる。夫を自分の方に引きつけやうとする。夫はそれが鼻につく。大した感興も起らず。細君は心中で夫を恨む

○Loveの素質あつてLoveを満足させた事のない人の他の愛に向つて同情なき敘述

○ハニカミ屋

○惚れ合つて夫婦になつたもの、段々喧嘩をする。細君往時を回顧して先にやさしかつたのは金であると解釋す

○フロックコートと軍艦

○亡妻。彼女は何處へ行つた。私は何處にゐる。云々。

其人又新らしきラヴァツフヘヤーを遣る。曰く私は此所にゐた。

友達笑つて曰くsuitが又墮落した。厭世を治するものはLoveだ。

しばらくして其人又不安になる。「此所にゐると思つた私が又何處かへ行つてしまつた。どうしたら好いだらう」

○殺人の箭か、活人の箭か。

「其坊さんは箭殺されたのか」
「いゝや」
「殺されない事を承知の上で胸を敲いたのか」
「それぢややまを張つたやうなものだらう。機略だらう。殺されてもびくともしない氣がある
ので全體が生きて來るのだらう」

音樂會

○〇〇の音樂會。子供無邪氣で出る積で勉強してゐる。
「あいつに常識があれば構はないが」
「あいつは突飛だから何をするか分らない」
「宅の小供などを主にして音樂會をやれたもんぢやない」
「宅の小子供などは錢を取るべき音樂會へ顔を出す資格はない」
「餘興として御慰みになるにしても悪い」
「あいつは法螺吹か馬鹿だから。何方にしても變なプログラムを作る恐がある」

○Loveの満足を得た夫婦。無暗に他人に同情を感じ金などを遣る。其満足の薄らいで來た時、
段々冷淡になり、施しや金を貸したがらなくなる。
○何うして暮してゐるんですか。

「出所があるんだらう」
「……」

「政府から貰ふのさ」
「無暗に金をやつて構はないんですか」
「構つても仕方がないから遣るのさ」
「演職事件が起るでせう」
「起らない場合の方が多いに極つてるさ」
「でも悪い事でせう」

「己の宅へ來て金を借りられるより増しだらう」
○爆彈事件豫審決定

○良寛の書七絶聯落、越後柏崎の在にある舊家より出しもの。

良寛は氣に入つたものには沙門良寛とかき猶好きものには越州沙門良寛とかきし由。田崎良寛
といふは良寛在世の頃よりの偽書家にて良寛通りの書をかきし故人其姓田崎の下に良寛の二字を
加へ偽筆に會へば是は田崎良寛かと訊くといふ。良寛屏風ならば立派なものに書きしかど、托鉢
の序など書いてもらふ時はあり合せの紙など繼ぎて氣の變らぬうちに書いて貰ひし由。夫故美濃
紙を横に繼ぎたる如何はしき紙に書きたる方が却つて本物の場合多しといふ。彼は酒を少ししか
飲まぬ癖に酒をくれると書を書きし由。魚をくれると書きし由。

田崎は間違。島崎良寛。島崎といふ所にゐたる故にしかいふとなり

○男は女、女は男を要求す。さうしてそれを見出した時御互に不満足を感じ。自分に必要でさうして自分の有つてゐないものを他に於て見出すが故に互に要求する也。同時に自分になくして他にあるものは元來自分と性質を異にしてゐる故に衝突を感じるなり。コンプレメンタリとして他を抱擁せんとするものはアイデンチカルならざる故に又他を排斥するなり。故に陰陽は相引き又相弾く。相引く事に快を取らんとすれば相弾く苦痛をも忍ばざるべからず

○我一人の爲の愛か

「私はそんな氣の多い人は嫌です。自分一人を愛して呉れる人でなくつては」

「外の人は全く愛せず自分丈に愛の量を集めやうといふのですね」

「さうです」

「すると其男に取つて貴女以外の女は丸で女でなくなるのですな」

「ええ」

「何うしてそれが出来ます」

「完全の愛はそんなさうでせう。其所迄行かなくつちや本當の愛を感じる譯に行かないぢやありませんか」

「然し考へて御覽なさい。あなた以外の女を女と思はないで、あなた丈を女と思ふといふ事は

理性でも悟性でもに訴へて出来る事ではせうか」

「感情の上では出来る筈ぢやありませんか」

「然しあなた丈を女と思ふといふと解し得られる様ですが外の女を女と思ふなといふと想像が出来なくなるやうです。何故といふと若し外の女を女と思はないで済むなら肝心の貴女をさへ女と思へる筈がないからです。自分の家の花丈が花で外の家の花は花ぢやない枯草だといふのと同じだから」

「枯草でいゝぢやありませんか」

「枯草つていふ譯がないんですから。夫よりか好きな女も嫌な女もあり、其好きな女にも嫌な所があつて、其興味を有つてゐる凡ての女の中で一番あなたが好きだと云はれてこそ貴女は本當に愛されてゐるんぢやありませんか。絶対にぢやない比較的で澤山だ

○齒石、唾石、——是は唾液中にある石灰質が齒根に沈着するもの。此齒石が齒莖を壓する結果、ハグキが段々低くなるに付けて齒が段々高くなる。さうしてハグキから少しづつワミが出る。齒の長さの三分の二は齒莖の中に埋つてゐる。

結石 是は齒の根に着くもの。どうしても上から沈着したものは思はれない。だから血液の中から出たものといふ説になつてゐる。所が大變見分にくいもので、あると思つて切つて見るとなかつたり。無いと思つて抜いて見るとあつたりする

モデリングを取つて今度は石膏で齒型を拵らへ。その空き間即ち齒の抜けた部分の恰形に應じ

て瀬戸物の形で入歯を作る。

○「あの人はあんな凝つた服装をしてゐるがちつとも厭味でない」

「そりや地味なものを着るからさ」

「着物の柄からばかりぢやありません。あの様子がさうなんです。だから不思議に思ふのです」

「そりや自分の着物の事を忘れてゐるからさ」

「だつて自分が好きで」拵へたものぢやありませんか」

「選擇や好悪はあるさ。けれどもそれを始終持つて廻つてゐないんだ」

「選擇や好悪があつてどうしてそれを忘れる事が出来ませぬ」

「それさ。選擇や好悪は着物にあるんで着る人に存するのぢやない。だから人の顔を見て自分の着物と其人の着物とを比較しないのさ。即ち彼對我の優劣を眼中に置いてゐないのさ。人を離れた着物といふ事になるからな」

○アスナラウ

「あいつはアスナラウが大嫌なんだが、所がまた運悪く今度のうちには其ア^取ナナラウがによき／＼生へてゐるのさ」

「あんな氣六づかし屋には好い薬になつて結構だ」

「さうさ。左様いへばそんなものかも知れない。然しいくらアスナラウが彼奴に厭な思ひをさ

せたつて、彼奴の氣六づかしさが減するといふ譯でもないんだからな。それよ「り」アスナラウの方で一層の事あいつの好きな松とか竹とかに變化して遣る方が好いだらう。あいつの爲にもアスナの爲にも其方が仕合せだ」

○「新らしい芝居は分らない」

「新らしい芝居は分らない。言葉が分らないのかと思ふとさうでない。役者が悪いのだ。何故かといふ舊い芝居を聴いても矢張り意味の解らない事をいふが夫で矢つ張り解るんだから」

「英語の芝居を見て何をいつてゐるか丸で解らなくつても夫でも劇は略解るさ」

此問答は二つとも論理を誤れり。一は解るべきア^取ヌングを有つてゐる上で解らないといふ結論を得、一は解らないといふ土臺の上に立つて解るといふ。二つの結論に達する方向は丸で反對である。だから前者の解らないといふ意味と後者の解るといふ意味とは事實引繰り返つてゐて、程度からいふと解らないといふ方が却つて解るといふよりも解つてゐる事になる。

○中老の男女を得て若返る

「あの人は近頃大分若返つたね」

「さう云へば一時は大いに悲觀してくすぽつてゐたが、近來は大分元氣がよくなつた様だ。然し派出なネ^取タイをしたり、無暗に着物を詮議したりするのはちと時代錯誤だな」

「そんな事に興味を持ち得る程に精神が刺戟に應じ易くなつたのだ」

「さう云へばあの年でとかいゝ年をしてとか云つて滑稽にばかり觀察するのも能くないね。つまり夫丈若くなつたんだから」

「若い女を得た快樂といふものは恐ろしい結果を持ち來すものだな」

「あまり快樂を貪つてゐるうちにどさりと來くから險呑だ」

「そりや俗に女に殺されるとかいふ奴を眞面目に受けていふんだらうが、俗説は大いに間違つてゐる。あの元氣は精神的ばかりぢやない。生理的にも出て來たんだ。否生理的な元氣が精神に及ぼした點も大變多い」

「さうかな。何うして？。僕はさうは思はない。たとひ精神的には元氣をつけるにしても生理的には有害だらうと思ふ」

「所がそりや間違つてる。醫者は何ういふか知らんが、氣の利いた醫者なら僕に同意するだらうと思ふ。若い女と接觸するのは老人を殺すんぢやない。生かすんだ。其所には微妙な生理作用が行はれるに相違ない。血行運動が好くなるんだらう。さうしてその血行運動が凡ての内臓の作用を鼓舞するんだらう」

○ Crato m'è il sonno, e più d'esser di sasso.

Sweet is sleep to me, but sweeter still to be of stone. — Inscription on Michael Angelo's 'Night'.

○鑑賞と鑑定

鑑賞は信仰である。己に足りて外に待つ事なきものである。始から落付いてゐる。愛である。惚れるのである

鑑定は研究である。何處迄行つても不満足である。諸所を尋ねあるき、諸方へ持つて廻つて遂に落ち付かない。猜疑である。探偵であるから安心の際限がないのである。

○ミズスルター

The mistletoe was held in great reverence by the Druids. It was believed to be particularly and divinely healing: in fact, it was given this attribute for centuries. It had special significance as the cause of the death of Balder, the Norse Apollo, who was killed by an arrow made from its branches. Subsequently Balder was restored to life, the mistletoe tree was placed under the care of Friga, and from that time until it touched the earth was never again to be an instrument of evil.

The present custom of kissing under the mistletoe is the outcome of an old practice of the Druids. Persons of opposite sexes passed under the suspended bough and gave each other the kiss of love and peace in full assurance that, though it had caused Balder's death, it had lost all its power of doing harm since his restoration.

○子供

星野勘右衛門は天下の豪傑。三宅たく兵衛、田村宇平次
泥だらけの足で風呂場の口から這入ってくる。桶の中に足を入れやうとして叱られ、やつと足
を洗ふや否や亞鉛花澱粉のはけで足の上へ御白粉をつけて出て行く。

○飛行機

小田原の早川口で輕便鐵道の硝子窓越に見て見ると向ふの空に飛行機が見える。それが見てお
るうちに傾いて來た。さうして誰が眼にももう墜落しさうに見えた時、彼は思はず大きな聲を出
して「あゝつ」と云つた。すると其飛行機らしいものは飛行機の恰好をした凧であつた。

○工場。二千坪、松三百本。

○ヤングマン。youthful spirit.

○出雲町 平民病院。南金六町から出雲橋を渡る。逓信博物館、逓信構内郵便局。木挽町配電所
右側(赤煉瓦)

曲る。河内屋。左農商務省 精養軒。橋向ふ野田屋。渡つて真直に河岸を行く。右海軍省?左
香雪軒。角新喜樂。

就いて曲る。左側林病院。右本願寺其前を一寸出て右に曲る。橋を渡る。

前に立教中學校。其東後ろ居留地

○河岸の船から薬を卸してゐる。馬に乗せる。非常に高く見える(四月八日)

○スミスの宙返り

午後二時頃家を出て七軒寺町の大通へ出ると往來が何時になく賑やかで丸で縁日のやうにぞろ
／＼してゐる。今日は外套も要らない暖かい日和なのと土曜に當るので斯んなに人が出るのかと
思ふと、彼等の視線はみんな南の空に注がれてゐる。今日はスミスが青山の練兵場で曲乗飛行を
やるといふ事を忘れてゐた自分は漸く氣がついて、みんなの視る方を眺める果して向ふの電信柱
の上に一台の飛行器が飛んでゐた。

春の空が折から曇つて風のない空は烟るやうに柔かに見えた。機は其間を心持よささうに搖曳
してゐた。やがて高い空の上でぐる／＼と大きな輪を描いて廻轉したと見ると、其機首は空に逆
はないやうにやんわりと下から上の方に向いて故の位地に復した。夫から鳥の兩翼をひろげて空
を伸すやうに、又羽搏をしないでバランスを保つ時のやうに自然の勢で右左に搖曳するやうに見
えた。すると又ぐるりと廻轉した。ぐるりといふ言葉は少し強過ぎるかも知れないやうに、なだ
らかな大きな圓を描いて、ふわりと飛首が上りつゝ又進みつゝ故の位地に復するのである。(凧の
ぐる／＼轉るやうな性急なものでは決してなかつた。)

最後に機は眞逆さまになつて流星の様な勢で落ちた。今迄ふわ／＼漂ひながら舞ふ如く廻轉し
たり逆轉したりする有様を眺めてゐた自分は此急速度の直線を眺めた時、おやと思つた。其時機
は同じ速度で人家の下に隠れた。

「今のは落ちたんぢやないか」
 「落ちたんだらうね。なんぼなんだつて、あゝ早くは降りられまい」
 あゝ速度で家の後ろに隠れたあの後は何うなつたのだらう。最後を見届けない時は心掛りなものである。

○笑談なら笑談でよし眞面目なら眞面目でよし。笑談とも眞面目ともつかない事をいふ男あり。之は徒らに其男の性質に曇りをかけるやうなものだから云はない方がいゝ。(鏡の曇り)

○藤の木。馬具師の庇の上に棚を釣つてある。其傍にサイカチの木があつてそれに藤の枝が纏つてゐる。馬具屋の庇には志方講、三寶珠講といふ札、店の板の間には和倉繩、ブラン、赤い

○夫婦相せめぐ 外其侮を防ぐ

○喧嘩、不快、リバルジョンが自然の偉大な力の前に畏縮すると同時に相手は今迄の相違を忘れて抱擁してゐる

○喧嘩、細君の病氣を起す。夫の看病。漸々兩者の接近。それが action にあらはるゝ時。細君はたゞ微笑してカレンシングを受く。決して過去に溯つて難詰せず。夫はそれを愛すると同時に、何時でも又して遣られたといふ感じになる。

○Life 露西亞の小説を讀んで自分と同じ事が書いてあるのに驚ろく。さうして只クリチカル

の瞬間にうまく逃れたと逃れないとの相違である。といふ筋

○二人して一人の女を思ふ。一人は消極、sad, noble, shy, religious. 一人は active, social. 後者遂に女を得。前者女を得られて急に淋しさを強く感ずる。居たゝまれなくなる。life の meaning を疑ふ。遂に女を口説く。女(實は其人をひそかに愛してゐる事を發見して戦慄しながら)時期後れたるを論ず。男聽かず。生活の本當の意義を論ず。女は姦通か。自殺か。男を排斥するかの方法を有つ。女自殺すると假定す。男惘然として自殺せんとして能はず。僧になる。又還俗す。或所で彼女の夫と會す。

○四月二十一日〔木〕季節物

×若い齒染延びつくす

×彼岸櫻殆んど散り盡す

×小梅櫻。花咲く。白及び紅

×椿 花咲く

×ギボシ延びる。縞蘆のびる。

×九花蘭の花莖のびる。未開。

×いかり草花 花咲く

×かすみ草 地から芽を抽く

- ×小でまり 花咲く
- ×苗賣。朝顔 松葉牡丹、ダリヤの芽、及種 瓢箪、
- ×芭蕉芽を吹く
- ×山吹花咲く。
- ×萩芽を吹く一寸
- ×紫陽花二寸
- ×蔦 びか／＼光る葉を着く一寸五分四方位。
- ×百合の芽六七寸。但し活花は既にあり。
- ×柘榴まだ芽を吹かず

(一)尿
(二)二十四時間

(三)食前膀胱を空虚。食後二時間

- (二)誤解 日本及日本人。それをaが引用
- (三)芝居と輕蔑。劇を見てもいゝ氣にはなつてゐない。さうして役者どもを馬鹿にしてゐる。同時に色氣がある解脱しきれない人間。女に對しても
- (四)他の人のエキスペンスで笑を贏ち得る事の倫理觀上の不快とのバランスを取つての考察

(五)鴨居勘右衛門。豚、御多福
屈辱を感じるにあらず不徳義を憤るなり公憤なり

四月二十三日(土)記

- 糖尿病。渡邊と談話の時、眞鍋に話して貰ふ。眞鍋から電話。大學の物理的治療室に至る。尿検査、糖分大分出るといふ。
- ×二日間蛋白性のものばかり食つて、二日目の二十四時間の尿を送る。結果二十四時の尿には糖分ナシトイフ。然し二十四時間で薄められてゐるから糖の尤も出る食後二時間の分を選んで試験するといふ
- ×其翌日食事をする前膀胱を空虚にして置いて食後二時の尿、朝、晝、晩に分けて、取つて置いて翌朝(二十一日)送る
- ×二十三日朝眞鍋から電話で糖は矢張り出るが、前の半分は減じたが此前は二十四時間の尿を送つた後すぐ平生食物を取り、又試験の爲めと聞いて食事を變更したのだから、もう一度試験したい、且此食事でどの位糖が減じ又身體が保つか試験しなければならぬといふ。即ち二十五の尿を三回分二十五日朝に送る事にする。(眞鍋に見て貰つてからあすの月曜が丁度一週間目である)
- ×二十六日(火)眞鍋から電話。尿は幸にして糖なし。此上はどの位糖を食つて差支ないかの試験をするから。土曜日(二十八?九?)に早食事前膀胱を空虚にして食パンの八分一を食ひ食後二

時間目の尿を送れと云つてくる。

×二十九日夜眞鍋からの電話。尿には糖分ナシ。今度は麵麩半斤の八分一を朝、午、晩、三度食つて、(食前空腹にした膀胱にたまる食後二時間目の尿を三瓶よこせといふのである。三十日の尿を指揮通り取つて置いて一日に送る事にする。

×五月二日早眞鍋より電話。昨日の尿には異常なし。午に麵麩半斤の四分一、晩に二分一を食つて食後二時間目の尿を今度はよこせといふ。

×三日夜眞鍋より電話もうパン半斤の四分一では糖分が出ないといふ。明日は三食共二分一を食ひ食後二時間目の尿をよこせといふ。

×五日夜の電話報告、朝は出る、午はなし晩は出る。それでパン半斤の二分では糖分出る。今度は飯を半ゼンで試験するといふ。六日の午の尿を持たしてやる

五月十六日〔月〕迄病氣。十六日起る。十七日眞鍋の電話。パン半斤の三分一で試験。十八日夜電話デ報告二返は出ズ一返は糖出る。

×季節。五月四日〔水〕、柘榴芽を吹く。葉外部茶シン薄青一面に光る。カナメも同じ。薄の芽二尺程になる。床に牡丹同時に白水仙

○自然科学一般化 その法則を個性に適用する醫術の不完全

○科學の應用(工科)と文藝 個象より出立する。法則より出立する。ユニヴァーサリチーの程度(双方)

○實社會に入つて修養すべし。修養してから活動すべし。何方でもいゝ事だから、他を排斥する必要なし。たゞ個人に即していふから議論になる。甲の心懸で無暗に實社會に突入されては困る。乙の心得で無暗に高踏されては困る。

○倫理的にして始めて藝術的なり。眞に藝術的なるものは必ず倫理的なり。

○女を犯したる人の翌日の心理の變化。退潮の有様。不關焉の心。従つて後悔の状態。

五月二十八日〔土〕

○糖分の検査つゞき。五月二十八日(?)眞鍋より電話。午、晩、二十九日朝、の尿を例の如くパン三分一で試すといふ。二十九日送る。三十一日電話にて報告あり。午の分に出る。是は朝腦を使ふ仕事(小説一回を書く)の爲だらうとの疑。是から毎週一回宛尿の検査をやるといふ。午の分に出た糖分は前のより少量なる由。眞鍋の助手は研究のため自分の小便の表を作つてゐる由。

六月二日〔木〕 子供と話

「お父さん箒星が出ると何か悪い事があるんでせう」

「昔はさうさ。人が何も知らないから。今は人が物事が解つて來たからそんな事はない」

「西洋では」
「西洋では昔からない」
「でもシーザーの死ぬ前の日に彗星が出たつていふぢやないの」
「うんシーザーの殺される前の日か。そりや羅馬の時代だからな」

「お父さま地面の下は水でせう」
「さうさ水だ井戸を掘ると水が出るからな」
「それぢやなぜ地面が落ちぢやないの」
「それやお前落ちないさ」
「だつて下が水なら落ちる譯ぢやないの」
「さう旨くは行かないよ」

「お父さま、此宅が軍艦だと好いな。お父さまは」
「お父さまはたゞの宅の方が好いね」
「何故」
「何故つて譯もないが」
「だつて地震の時宅なら潰れるぢやないの」
「ハ、ア軍艦なら潰れないか。こいつは氣が付かなかつたな」

六月初

柿の花、落ち。豆蔕の花(梅にからんだ)落つ。熊ん蜂が其  (形)を吸に来る

六月七日〔火〕

袁世凱の死
キツチナーの溺死
北海海戦の際クキーンメリ號に觀戰武官として乗り込みたる下村小佐^原の死
一時に傳へらる 其他
タゴールが横山大觀の家に逗留の事。スミスが昨日の飛行、一昨夜の夜間飛行。原、犬養、加藤三人三浦邸會合の事

六月十五^原〔水〕 薩摩上布(三十二圓)十ノ字拵。皆川より着

六月十六日〔木〕 (十七日)

大風。柿の(豆見たやうな)實落つ。栗の花。スミス墜落

六月十七日〔金〕

- ×三笠絹
 - ×より三笠
 - ×冷風紗
 - ×青梅紗
 - ×両面紗
- 極暑夏羽織

○六月二十日頃。パン半斤ノ五分二にて試験。報告 無糖分

六月二十六日〔日〕梅雨がしきりに降る。此間から入梅なれど去したる雨量もなし、或時は蒸暑し、五六日前より白地の浴衣を着、小供は氷水をのむ。今日はさすがに白地を着る氣なく。紬の單に白の繻絆を重ねぬ。

六月二十二三日頃。縁日 白百合、柘榴ザクワの眞紅の花。紫陽花、ジエレニアム

六月二十六日 風 裕
 六月二十七 豪雨。羽織 を着てもよし

六月二十八日 陰 矢張寒し

六月二十八日〔火〕

○銅器に色をつけるもの、かりやすか、草の名 黄色になる
 ○上州で繭からザクリ(?)で糸をとる事。(手でとる事)。上手なものは七升位とる。器械よりわるし(蒸汽)

葉物の刈込

- 五月 一回
- ヒバ 六月梅雨中
- カナメ 等 土曜後
- 青桐 九月 一回
- 松ハ みどりの長く延びないうち、まづ五月

六月下旬季節もの 青鬼灯、所々ニ白き花

糖

(六月二十九日〔水〕午後。晩。六月三十日朝、パン半斤二分ノ一で尿につき糖分の試験 午後と朝ニ糖分ナシ。晩ニハ出た。

六月三十日〔木〕バンドマン行

六月九日〔土〕小宅の庭前^原

○鳳仙花 花(赤い)さく

○わすれな草。薄いら^原エンダーカラーノ五瓣極小

○孔雀草、黄八瓣の本^原(黒赤)

○小櫻草

○われもこ^{さま}う

○葉鶏頭。長さ四寸程

○董 三寸程 花あり濃紫

○新菊

○おいらん草

○おしろい草。まだ咲かず。八月さく

○百合

○カンナ(まだ咲かず)咲いたのもあり

○虎の尾(五寸程

○きりん草。

七月十一日〔月〕 糖試験

午、晩、(十二日)朝 パン半斤二分一ニテ試験

七月二十七日〔水〕? (土用丑の日) 前後

雨、寒。麻のシャツを浴衣の下に着る。

斷片

——大正五年初夏頃——

—

〔「明暗」〕

小林さん 醫者

津田由雄
のぶ

38 50位
住 岡本精
一 百合 繼
(十) (14) (20)

片斷

朝 藤井

眞事 喜久 眞弓

小林
お金

喜多
×吉川 正夫
吉川 奈津
直之助
三好

津田の妹婿×
堀 秀ひこ
庄太郎
由子よし

津田の上役
佐々木

×嫁入の事
×金の事
×結婚に對する批評の事

うき／＼する事、
まだ定まらぬ事

芝居へ行きたがる
病院へ一所に行きたがる
髪を刈れといふ

×京都からの事
×病氣入院の事
×子供に會つて強請の事
津田
藤井夫婦

三人對話

アテコスラレテ怒ルノハ、自分にサウ云
フ句があるからだ。答曰ク、泥棒ヲシナ
ケレバ泥棒扱ニサレテモ腹ハタ、ナイカ

一ハ後から脊中をどやす
二ハ其賠償として後から其脊中をさする

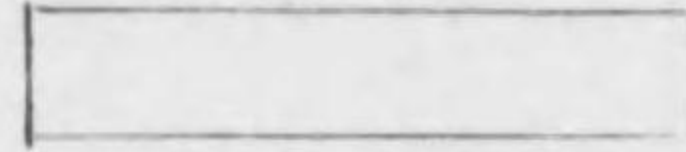
○ホゴス、ホゴサヌ事
○君は gen. case フ以テ P. case フ律セントスル。僕ハ P. カラ B. case フ割リ出サ
ウトスル

東家松籟起西屋竹珊々
 秋露下南湖黃花粲照顏
 欲行沿湖遠却得與雲還
 花生曉夢迷蝴蝶望帝春心託杜鵑
 香消南國美人盡照入東風芳草多
 濃眊覺來鶯亂語驚殘好夢無尋處

小山 吉川 吉川 津田 岡 岡本 岡本
 男 女 男 延^原 娘 女
 男 女 男 延^原 繼 住
 △ △
 精

二

吉川 繼 延



住 三好 岡本 奈津

客路青山外行舟綠水前
 源水看花入幽林採蘭行
 月從山上落河入斗間橫
 無心到處禪
 林下僧無事江清日復長
 隔水東西住閑雲往復還

補
遺

斷片

—明治三十七八年頃—

—

Blanche — Laura Bell Pendernis
Beatix — — — — — Esmond
Amelia — Becky Sharp. Vanity Fair

A man can't live upon air, be hanged to you
—Pendernis XXX. p. 297

—

遺補片斷

○夏ハ身投多シ。女ノ身投ハ巡査が親切に介抱シ。男ノ身投ハ平氣だと云ふ

- 淺草ノ淫賣婦ノ店頭ハ警世書屋出版ノ書ヲ專賣スル。良心起原論。耶蘇傳。釋迦牟〔尼〕傳
- 水戸ノ家ノ子ガ大學生デ(ポートルース)ヲヤルト家中ノモノガ一同旗ヲフル、抱ヘノ車夫ガ列ヲ組ンデ聲援スル、巡查ガ捉まへる、車夫曰ク徳川様だ。巡查忽ち之ヲ放免ス
- 女學校ノ教師曰ク女教師ハ産前一月、産後一月ハ既得權トシテ休業ス。經濟上厄介ナリ
- 地代ヲ月ニ百二十圓拂ツテ居テハ購カラス
- 月ニ五百人ノ生徒ガアレバ校舍ヲ五千圓カケテ新築シテモ六年ノ後ニハ皆濟ガ出來ル、然シ其時ニハ又本舎ノ大修復ヲ要スル、中々うまく購カラナイ、
- 黒田清暉原曰ク先日支那公使館へ行つたら公使ノ令嬢が僕ニ Love シテ居タラシイガ不幸ニシテ言語ガ通ジナイノデ分ラナカッタ、秘密ヲ守ル信用ノ出來ル通辯ガ居ルナラ周旋シテクレ
- 圖書館を出たら○君がくる君にして此熱いのに勉強するのは感心ダト思つたら、小便をしに來たのだと云ふ。
- オイノト云ふから振り向く、○君が頭を半分刈つたなり立つて居る。譯を聞くと此先の髮結所ニ居つたが君の姿が鏡ニ寫つたから飛び出して來た
- 大學デ珠ヲスル
- 人間ノ氣取ル。髮の分け方。食物。四這
- Hannibal ト酢
- 蛙の眼球の電動的作用に對する紫外光線の影響。

三

- 〔三字不明〕一催眠術
- 帝國ホテル。鏡前直し
- 烏帽子折の太鼓
- 音樂會のシンバル。と太鼓
- スツボン事件
- 辨當の御菜……
- 牛の乳を飲むと牛になる

神から信仰をとると鱈の頭
人間は人間を食ふもの

赤十字總會〔以下一二字不明〕

風〔以下一字不明〕

學校 無理でも勢力に服従する。Nudeノ哲學 60年前英國ノアル田舎で圖案學校ヲタテタ
裸體像ヲコトク植木デカクシテ Soirée ヲヤツタ。然ルニ彼等は夜肩ヲアラハシ手ヲアラハ
ス。是は文藝復興時代ノ淫靡ナ風ト古代ノ Ethos ヲ慕フカラ出タ。十四世紀迄ハ歐人ノ衣服ハ
decent テアツタ (Valerius Maximus p 131) 希臘人ガハダカノ感じハ自然テアル Purgatory
XXIII 87-99

寒月のヴァイオリン研究

電話を貸して下さい。貸せません。用事なら車へ乗つて行つたらいいでせう

多くの事を知る——地球が太陽の周囲を廻轉する事換言すれば——換言

Chrysippus——novel

Socrates swearing by the dog

Zeno " " the goat

虎の聲。

動物園の虎の聲を聞きに行く。

オヤマア

雁の味—蕪+塩煎餅

焼芋 (多數食 い induction)

木登リ。

烏ト喧嘩。

馬の歴史。

三

遺補片斷

○ After the occupation of the country by the Romans, it appears that the horses of
their cavalry were crossed with the native mares.

○ Zutes and Saxons 同様

○ Norman Conquest 同様 William the Conqueror の馬は Spanish breed. 農事ニ馬ヲ使用
スルーハ後世ノ事ナリ、牛ヲ使用シタ
○ Crusaders 同様
.....

○ Queen Elizabeth, 馬好き、馬車ガ出來ル、夫迄ハ乘馬ナリ

○ James I gave 500 guineas for an Arab Stallion which had been procured from Constantinople by a Mr Markham "markham Arabian"

○ Charles II. 東方カラ introduce シタ馬ハ "Royal-Maus" ト俗ニ云フ
○ W^m III 1) Byerly Turk modern thoroughbred race horse の元祖 Captain Byerly's
Charger in Ireland in King W^m's wars.

2) Darley Arabian—imported from Aleppo by a brother of Mr Darley of
Aldly Park, Yorkshire

3) Godolphin Arabian or Bart
Ultima Thule of Racing pedigree

○ The Thoroughbred.—The third and last epoch of the British horse, viz. that of the thoroughbred racer may be taken to date from the beginning of the 18th century. By thoroughbred is meant a horse or mare whose pedigree is registered in the Stud-Book kept by Messrs Weatherly, the official agents of the Jockey Club—originally termed

the keepers of the match-book—as well as publishers of the *Racing Calendar*.
The Stud-book published 1808

Manica (foaled in 1707)

Darley Arabian Aleppo (1711)

ノ十 Almanzor (1713)

Flying Childers

Bartlett's Childers

Roxana 1718 threw in 1732 the bay colt Leth by the Godolphin Arabian

1733 the sorrel colt Roundhead by Childers

1734 the bay colt Cade by the Godolphin Arabian

是ハ佛ヨリ來ル、誰モ其伎倆ヲ知ル者ガナカッタ、
Paris ノ町デ荷車ヲ引イテ居タ
Sir of Regulus the maternal grandsire of Eclipse
died at Gogmogog in Cambridgeshire, in the possession of Lord
Godolphin in 1753 in his twenty-ninth year, believed to have been
foaled in Barbary about 1724

× Horse-Racing L1. xxiii L16-650

× four-horse chariot race introduced as early as the 23^d Olympiad

× Aristophanes *The Clouds* ㄨ

× "Description of the city of London" of W^m Fitzstephen (c. 1174) 藝文叢書

× public races were established at Chester in 1512

× Silver bell 銀鐘 ㄨ 銀 1540

× 1725 國々 national sports ㄨ 1725

The Derby 1780, Oaks 1779

The Darley Arabian's line is represented in a twofold degree—first, through his son *Flying Childers*, his grandsons *Blaze* and *Snip*, and his great-grandson *Snop*, and, secondly, through his other son Bartlett's Childers and his great-great-grandson Eclipse. Flying and Devonshire Childers, so called to distinguish him from others ^{sic} horses of the same name, was a bay horse of entirely Eastern blood, with a blaze in his face and four white feet, foaled in 1715. He was bred by Mr Leonard Childers of Carr House near Doncaster and was purchased when young by the duke of Devonshire. He was got by the Darley Arabian from Betty Leeds, by Cautless from sister of Leeds, by Leeds's ^{sic} Arabian from a man of Spanker out of a Barb mare, who was Spanker's own mother.

Spanker himself was by d'Aray's Yellow Turk from a daughter of the Morocco Barb and Old Bald Peg, by an Arab horse from a Barb mare. Cautless was by Spanker from a Barb mare, so that Childers' dam was closely in-bred to Spanker.

Flying Childers—the wonder of his time—was never beaten, and died in the duke of Devonshire's stud in 1741, aged twenty-six years. He was the sire of, among other horses, Blaze (1750) and it is chiefly in the female line through the mares of those horses, of which then are fully thirsty in the Stud-Book, that the blood of Flying Childers is handed down to us.

The other representative line of the Darley Arabian is through Bartlett's Childers, also bred of Mr Leonard Childers, and sold to Mr Bartlett of Masham, in Yorkshire. He was for several called Young Childers—it being generally supposed that he was a younger brother of his Flying namesake, but his date of birth is not on record,—and subsequently Bartlett's Childers. This horse, who was never trained, was the sire of Squirt (1732), whose son Marske (1750) begot Eclipse and young Marske (1762), sire of Shuttle (1793). This at least the generally accepted theory, although Eclipse's dam is said to have been covered by Shakespeare as well as by Marske Shakespeare was the son of Hobgoblin by Aleppo, and consequently the male line of the Darley Arabian roved came through these horses instead of through Bartlett's Childers, Squirt,

and Marske; the *Shadlock*, however, says that Marske was the sire of Eclipse. This last-named celebrated horse—perhaps the most celebrated in the animal of the turf—was foaled on the 1st of April 1764, the day on which a remarkable eclipse of the sun occurred, and he was named after it. He was bred by the duke of Cumberland, after whose decease he was purchased by a Mr Wildman, and subsequently sold to Mr D. O'Kelly, with whom he will ever be identified. His dam Spiletta was by Regulus, son of the Godolphin Barb, from mother Western, by a son of Snake from a mare of old Montague out of a mare by Hautloy, from a daughter of Brimme, and a mare whose pedigrees are not known, but who are supposed to be of native blood. Eclipse was a chestnut horse with a white blaze down his face; his off hind leg was white from the hock downwards and he had black spots upon rump—this peculiarity coming down to the present day in direct male descent. His racing career commenced at five years of age, viz., on the 3d May 1769, at Epsom and terminated on the October 1770, at Newmarket. He ran or walked over for eighteen races and was never beaten. It was in his first race that Mr O'Kelly took the odds to a large amount before the start for the second heat, that he would place the horses. When called upon to declare, he uttered the exclamation, which the events justified, "Eclipse first and the rest nowhere."

H

○ I have not a doubt you are right; but you know what the philosophers say, with the Latin poets. What lighter than a feather?—dust. Lighter than dust?—wind. Lighter than wind?—woman. Lighter than woman?—nothing. (Musset *Barberine* II, 2)

○ 喜劇 行水ノ女ニ惚れる鳥かな

○ 空家へ蕎麥をあつらへる

○ Kanbukuro

○ Looking-glass

○ 自轉車、上野山中、邂逅、高利貸、女ノ自轉車へ乗つて逃げる、アトデ高利貸ト女ガ結婚スル

○ 女ヲloveスル、色々工夫シテ逢ハントスル、女ノ家へ火ヲツケル、出テ來ル所ヲ救ヒダサウトスル、消防夫ノ方ガ上手ニ救ツテ仕舞フ

○ 方寸、寸方、物ガinversionヲヤルト別物ニ見えル、此方ガpoint of viewヲinvertシテモ同様ノ結果デアル、高イ鼻ハ尤モ低イ鼻、

○ 根芋ノ味。36920 本ヲ食フテgeneralisation:—

(1) Size—middle 女 best (2) Colour (3)

Scientist の generalisation

○首を肩の上のせて居るさへ面倒くさい。目ばたきをするのが面倒だと云人がある、尤も義眼だ

○迷亭ノ著(1)結婚ノ不徳(2)獨身ノ害(3)野合ノ弊

其次ギハマダ考ヘヌ、其丈書いて居ル中ニ死ンデ仕舞フダラウ、死ニサハスレバ書カンドモいゝカラナ。書クノ書カヌノト何トカカントカ云フノハ生キテ居ルウチノコサ

○東風子ノ新體詩集(金田富子ノ君に捧ぐ)、萬葉ノ古語其他ワカラヌ戀ノ歌、主人云フ二三年前迄ハ分ツタガ今ハ分ラ「ヌ」暫ラクノ間ニ大分進歩シタモノダ

○*masih* 獨乙語モ佛語、獨乙デハ何ト云ヒマス、何大抵同ジサ、高ガ乾葡萄ダカラネ、

○静岡ノ廣小路ノ對山樓、下女、農學士、結婚を申し込む。

うどんが食ひたくなる。静岡にうどんがあるか。

其晩に腹が痛くなると静岡に醫者はあるかと云ふ。

うどんがある位だから醫者は無論あります。

翌朝になつて女が云ふには私はどこへ縁づいても宜しう御座いますがうどんの好きな人には結婚しないと云ふ願をかけました。

○女房取り換論

十二錢ノ雜誌ヲ十錢ニマケロ

六

○Gustave Flaubert, (*a Simple Heart*)

p. 27. 無邪氣ナル小兒ノ Christ ヲ様々ニ考フル處アリ。

女ノ水泳 *Cordova*

A few minutes before the Angelus, a great number of women assemble on the river bank, below the quay, which is quite high. No man would dare to join that group. As soon as the Angelus rings, it is supposed to be dark. At the last stroke of the bell, all those women undress and go into the water. Thereupon there is tremendous shouting and laughter and an infernal uproar. From the quay above, the men store at the bathers, squinting their eyes, but they see very little. However, those vague white shapes outlined against the dark blue of the stream set poetic minds at work; and with a little imagination it is not difficult to conjure up a vision of Diana and her nymph in the bath, without having to fear the fate of Acteaon. I had been told that

遺補片斷

on a certain day a member of profane scapegraces clubbed together to grease the palm of the bell-ringer at the cathedral and hire him to ring the Angelus twenty minutes before the legal hour. Although it was still broad day-light, the nymphs of the Guadalquivir did not hesitate, but trusting the Angelus rather than the sun, they fearlessly made their bathing toilet, which is always of the simplest. I was not there. In my day the bell-ringer was incorruptible, the twilight far from brilliant, and only a cat could have distinguished the oldest orange-woman from the prettiest grisetta in Cordova.

斷片

——明治三十八年十一月頃より明治三十九年夏頃まで——

—

○民ノ聲が天の聲ならば天の聲は愚の聲なり。

○月の世の諺に曰く

○邪なる人云ふわれに金力あり、威力あり、大衆あり。正しき人を攻めて、攻めて、正しき人の膝を屈する迄攻めよと。

攻める事一日を長くせば正しき人の膝は一日屈する事をのぼすべし。攻める事二日を長くせば正しき人の膝は二日屈する事をのぼすべし。攻める事千日を長くして正しき人の膝は遂に屈する事を得ざるべし。

日は空しく天に懸らず、水は自ら流る。正しき人の勝つは日の天にかゝり、水の流るゝが如く自然なり。如何に負けんとするも降らんとするも之を奈何ともする能はず。自ら奈何ともする能はざるものを人何んぞ奈何ともし得べけんや

始皇は長城を築きフェラオはピラミツドを築く宇宙の壯觀を指呼の間に湧出せしむるの技能あ

りと雖も日を暗くして水を一所にとゞむる事能はず。日の明らかなるは日の性なればなり。百の始皇ありとも千のフェラオありとも物の性を奪ふの力なし。性を奪ひ得たる時其物は既に其名を有せず。正しき人が膝を屈したる時に其人は既に正しからず。邪の人なり。群盲聾々たり。正義を以て只紙上の空名となす。正義は天地の間に蟠まる大活力なり。書をよまず字を知らざるもの一念勇猛の心を起したる時磅礴として天地靈活の氣と相觸る。一指を擧げて天を指す時正大の氣は大空に漲る。かの庸衆の喧噪し、紛擾し、小智小術を講じて一秒、一分、乃至一刻の計をめぐらして得々たる如き者は悉く蟻群の如く微弱なり。正大の氣來つて汝等を吹くとき瞬間にして靈界の表面より焦熱地獄に向つて墮落し來る。正義の士は彼等を賤しむのみ。彼等を輕しとなすのみ。彼等の人間と稱して社界に生存するを不思議と思ふのみ。百萬の小人ありと雖も一正義の士を奈何ともすべからず。

二

×人ニ可愛ガラレルノヲ嬉シキコトニ思ヘル時アリ。人に尊敬セラレルヲ難有シト思ヘル時アリ。人に對シテ圓滿ナルヲヨキ事ト思ヘルコトアリ。今ニシテ思ヘバ皆愚ナルコトナリ

×小人に可愛ガラレルハ君子の耻辱なり。小人に尊敬セラル、ハ君子の耻辱なり。小人と交つて圓滿なるは君子の耻辱ナリ。小人は君子ヨリ輕蔑セラル可キ運命ヲ以テ世界ニ生レ出デタル者

ナリ。小人ヲ輕蔑するは君子の義務ナリ。天下ニ嬉シキコト只一事アリ。小人ヲ輕蔑する事是なり。

×小人ノ尤モ憂ふる所は其技倆の功果を生ぜざる時にあり。小人をして日夜に奔走せしめ、日夜に勞苦せしめて、十年の功を徒勞に屬せしむるを以て君子は一大愉快となす。是君子の小人に對する輕蔑を表する唯一の良法なり。

×小人十年二十年の勞を一指頭に彈じ盡したる時君子の眉は始めて愁を開く。破顔して始めて墓に入るを得べし。

×小人は恐るべきものか、もしくは賤しむべきものなり。小人は自己の半面を知らず、己れは只他を恐れしむるの伎倆のみありと思へり。焉んぞ知らん。此伎倆こそ益他の輕蔑を招きつゝあるを。

×自己の技倆が他の輕蔑を招きつゝあるか、他の恐怖を起しつゝあるかをさへ辯ぜぬ程の者なれば只一圖に自己の技倆を弄して遂には人をして恐怖せしむるの時機至るべしと信ず。春過ぎて來るべき春を待つは夏に於てするも、秋に於てするも至當なり。只自己の技倆が他の輕蔑を招きつゝある際に一步を進めさへすれば變じて恐怖の念となし得べしと考ふるは尻より出たる糞便を睨めて居れば豆腐に變化する時機もあるべしと決心せるものゝ如し。

×小人の恐るべきは何をなしても憚からぬが故なり。小人の賤しむべきも亦何をなしても憚からぬが故なり。事は同じ。只相手によりては恐れられ、又相手によりて賤しめらる。之を混同するは小人の眼が股倉に着いて居る故なり。

×小人ヲ十個集むれば十個の小人を産す。百個集むれば百個の小人ヲ生ズ。百個千個に至ツテ正義ヲ恐怖セシメ得ルト思フハ天下ノ泥土ヲ積ンデ珠玉トナシ得ベシト誤解セルガ如シ

×小人ヲ遇スルニ君子ノ道を以テスレバ君子ハ常ニ敗ル。小人ヲ遇スルニ小人ノ道ヲ以テスルハ或ハ勝チ或ハ敗ル。小人ヲ遇スルニ小人以上ノ道ヲ以テスルハ小人ハ始メテ手ヲ束ネテ已ムベシ。

小人ノ道ハ他ナシ只人ヲ欺クノミ。小人以上ノ道トハ他ナシ。小人以上ノ頭腦ヲ以テ小人ヲ欺クノミ。只小人ハ己レノ智ノ程度ヲ知ラズ。事局ノ展開ニ展開ヲ重ネテ危機一髪に逼ル迄ハ自己ノ敗レタルヲ知ラズ。此故ニ小人ヲ服スルニハ多年ノ根氣ヲ要ス。十年モシクハ二十年乃至わが死ニ瀕スルニ至ツテ始メテ彼等ヲ服セシムルヲ得ベシ。

×彼等ヲ取扱フニ急グコナカレ。急グ時ハ彼等ノ術中ニ陥ル。急ガザルナカレ。急ガザルトキハ彼等ノ輕蔑スル所トナル。急グガ如ク急ガザル如クニシテ十年、二十年、モシクハ三十年ノ後ニ彼等の無智無能ニシテ且陋醜下劣ナルコトハ不言ノ間ニ明白ニスルヲ得ベシ。

三

×神ハ人間ノ理想ナリ。理想トハ二個ノ異ナル意義ヲ含ム。自己ノ有スル凡テノ良好ナル點ヲ自惚ノ顯微鏡ニカケテ見タルハ光彩陸離タル神トナリ。是一義ナリ。われはわが父母ヲ完キ人

ト思ハズ。わが君ヲ完キ人ト思ハズ。わが隣人朋友ヲ甚ダシキ陥缺アル人物ト思フ。完カラズ、陥缺アリトハ、われヲ遇スルノ點ニ於テ完カラヌナリ不公平ナルナリ。此不平ヲ世ノ中ニテ醫セント欲シテ得ズ、己ヲ得ズ、人間以上ノ神ヲ假定シテ慰藉トス。是神ノ第二義ナリ。

此故ニ神ハ尤モ大ナル自惚ヲ有スル人間ガ作りタルカ又ハ尤モ人ヨリ逆待セラレタル人間ガ慰藉ヲ求ムル爲メニ作りタル者ナリ。

前者ノ極端ニ達スレバ自己即チ神ナリ。釋迦是ナリ。(ニイチエ)ハ多少之ニ類似スレモ 後者ノ極端ニ至レバ自己即チ神ノ子ナリ。耶穌是ナリ。

×己レヲ根本トシテ己レガ人ニ對スルノ理想ヲ發表スル時ニ自己ハ即チ神ノ形式ニテアラハル。他ヲ根本トシテ他ガ如何ニ己レヲ遇シテクル、カノ理想ヲ發表スル片自己は即チ神ノ子ノ形式ニテアラハル。

×自己神ナレバ天上天下唯我獨尊ナリ。自己神ノ子ナレバ天上天下依頼スル所アリ。

×前者ヨリ云ヘバ父母ノ威モ、君主ノ權モ、陶朱ノ富モ皆ワガ膝下ニ跪ヅクベキ者ナリ

×後者ヨリ云ヘバ父母如何ニ無理ナルモ、君主如何ニ暴虐ナルモ、隣人朋友如何ニ無情ナルモ、最後ニ依頼スベキ神アルガ故ニ毫モ窮愁ナシ

×此兩者ノ間ニ彷徨スル者ヲ覺ラザル者ト云フ。救ハレザル子ト云フ。覺ラザル者ト救ハレザル子ト意義全ク異ニシテ其不幸ナルハ即チ一ナリ

×世界ニ自己ヲ神ト主張スル程ノ自惚者少ナシ。又自己ヲ神ノ子ナリト主張スル程ノ馬鹿者少ナシ。故ニ萬人ノ人ニ遇ヘバ萬人ナガラ皆不幸ナリ。

×不幸ハ彼等ノ尤モ厭フ所ナリ。此故ニ何等カノ方便ヲ求メテ此不幸ヲ逃レント欲ス
 ×不幸ヲ逃レント欲スルノ極ハ甘ンジデ大ナル自惚者トナリ。又大ナル馬鹿者トナラザル可ラズ
 ×ジレンマは明カラナリ。不幸ヲ甘ンズルカ。自惚者ト馬鹿者ニ強ヒテナルカ。
 ×大多數ノ人ハ不幸ニモ甘ンゼズ。又自惚レタリ馬鹿ニナリキル程ノ決心ナシ。
 ×是等ヲ常ノ人ト云フ
 ×不幸ニ甘ンズル人は昔ヨリ古人ニ至ツテ只一ノストイツク派ノ學者アリ。日本ノ武士亦之ニ近シ。

断片

——明治四十年、四十一年頃——

○ Relation から起る beauty.

- 1) Formal. — Proportion
- 2) Substantial —

例へば小説

第一篇——第二篇——第三篇

二ハ一ニ depend シテ面白ク。三ハ一ト二ニ depend シテ面白イ必ズシモ independent ニ面白ク
 ナクテモヨイ。カ、ル場合ニ起ル面白味ハ relation ヨリ起ルナリ。relation ノ面白味ニハ (一)
causal 是ハ時ニ refer ス。(二)ガ (1)ノ evolution トシテ出テクルコトヤ。(2)ガ (3)ノ cause ニナルコトヤ。
 凡テ是ニアツテハ時間ノ function テアル。(2)ハ *spacial* 是ハ Lessing ノ所謂 pictorial ナル者ナ
 リ。Lessing ハ poetry ノ essence トシテ時ニ入レタリ。然レモ必ズシモ同時ニ起ル objects 若
 クハ incidents ノ pleasure ヲ picture ニ限ル必要ナシ。(一)(二)(三)(四)(五)ガ時間ノ關係ナク小説ノ
 chapter トシテ排列セラレタルキニ其排列ノ順序如何ニ因ツテ pleasure ニ差違ヲ生ズルコトハ疑
 フベカラズ。Harmony, Contrast, Variety, Unity ノ感ヲ起スガ如シ。此ウチニ objective re-
 lation ト subjective relation トヲ區別スルヲ要ス。双方共 pleasure ナリ。Ob. Relation トハ時

断片補遺

ニ於テ(1)(2)(3)ト causalityヲ結ハザルモ(1)(2)(3)(4)ノ各 chapter 若クハ elementガ其自身ノ性質上互ニ關連スルナリ。 subjective relationトハ其 chapterヲヨム人ノ心ニ感想ノ Relationガアルノミニテ(1)(2)(3)(4)ノ chap.ノ contentsニハ objectivelyニ relationナキモ可ナルナリ。

○小説ニテ characterノ evolutionヨリ出來ル pleasureハ時ニ depends
○ Incidentノ evolutionヨリ出來ル pleasureモ時ニ dependス

○ picaresque novels or Romanceヨリ出來ル pleasureハ causalナラズ。 Pictureノ seriesヲ見ルガ如キ者ナリ其 each pictureガ面白ケレバヨキナリ。 Plotガナクテモ causalityガナクトモ構ハヌナリ。

○ Novelトサヘ云ハズ evolutionト離ルベカラザル者ト思ヘリ。然シ Evolutionナクシテ面白キ者アルヲ忘レタリ。忘ルノニアラザレト譯ガワカラヌナリ。

○ Objective Relationニヨリテ興味ノ變化スル場合

Oth. Now, by yond marble heaven,

(Kneels) In the due reverence of a sacred vow

I here engage my words.

Iago Do not rise yet,

[Kneels] Witness, you ever-burning lights above

You elements that clip us round about,

Witness that here Iago doth give up.

.....Othello Act III sc. iii

是ハ悲壯ナル感じヲ起ス句ナリ。然シ其悲壯ト云フ意味ハ Oth.モ Iagoモ dead earnestナルコトヲ presupposeセザル可ラズ。同時に noble causeニ身ヲ委ケルコトヲ presupposeセザル可ラズ。出來得ベクンバ、Oth.ト Iagoガ君臣ハ刎頸ノ盟アル義士ナルコトヲ presupposeスルコトヲ要ス。若シ然ラザレバ悲壯ノ感ハ起ラズ。所ガ實際ハ Iagoハ earnestナラズ Othelloハ earnestナルニ noble causeノ爲メニ earnestナルニアラズ。



○ Objective Relation (1) Othelloノ場合○ハ Othello全體ヲ示ス△ハ Othelloノ此句ヲ意味ス。スルト○:△ノ興味ハ○ノ性質如何ニヨリテキマルナリ。 Iagoノ△(句)ノ興味モ彼全體ヲ示ス○ト此句△トノ relationニヨリテ大變異ナツテケル。又 Othelloノ全體○ト Iagoノ全體○トノ性質ニヨリテ其對話(即チ上ノ二人ノ句ヲ sumシタル者)全體ノ興味ハ異ナツテケル。同書 Act III sc. IV.ニ Othelloガ Desdemonaノ手ヲ見テ暗ニ自己ノ怨恨ヲホノメカシテ其貞節ナキヲ見露ハサントカムル所アリ。

This argues fruitfulness and liberal heart :
Hot, hot, and moist : this hand of yours requires
A sequester from liberty, fostering, prayer,

Much castigation, exercise devout ;
For here's a young and sweating devil here,
That commonly rebels. 'Tis a good hand,
A Frank one

是ハ Hamlet ノ Ophelia ニ對スル語ト同ジ様ナ感ヲ起ス(單獨ニ見レバ) 然ルニ事實上ハ左様ナ感ガ起ラヌノハ矢張 Othello ナル全體〇ト△ナル此語ノ relation ガ Hamlet ナル〇ト△ナル Ophelia 對ノ語トノ如キ relation ヲ有セザレバナリ

○ Othello ノ case ニハ Othello ハ Des. ノ心ヲ見抜クノガ主意デアル。此語其者ハドウデモヨイ。此語ヲ借りテ自分ノ主意ヲ貫ケバイ、カラ。此語ニ importance ハ attach シテ居ラス。夫ダカラ、探偵的ナ文句デアル。毫モ感情ガ起ラナイ。pathetic ナ心細イ憐レナ感ガナイ

○ Hamlet ハ Ophelia ニ對シテソソク探偵的態度ヲトツテ居ラン。彼ノ云フコトモシ虚偽ノアル者ガアルトスレバ夫レハ自己ヲ隠ス爲メ消極的デアル。Othello は積極的ニワルガシコク出テ居テ居ルニ反シテ Ham. ハ自衛的不得已の中ニ大ニ同情ヲ表スベキ所ガアル

○ Ham. ノ Ophelia ヲ愛スルハ Othello ノ Des ヲ愛スルガ如クデアラウ。然シ Ham. ノハ他ノ duty ノ爲ニ Oph. ヲステルノデアル。其ウチニハ一種云フベカラザル forlorn ナ所ト邪見ノ様ナ底ニ纏綿ノ情ヲ想見スルコトガ出來ル。Othello ハ Des. ヲ罰シ様ト云フノ

デアル。彼ノ語ノ hysteric ナルハ bloody ナル hysteric デ幽玄ナル情緒ガ突沸ナル言葉ヲカリテアラハレタ者トハ見ヘヌ。Sacrifice ノ言語ニアラズシテ利害ノ念。得損ヲ含ンタル商賈的^原ナ文句デアル

○此 Evolution ト Pictorial ノ關係ハ短^原ニ小説杯ノ chapter ノミナラズ。Paragraph ニモアリ
○ Paragraph ノ evolution ハ order ナリ one sentence ガ naturally 1 another sentence 1 follow スルコトナリ。Naturally トハ如何。

1) Naturally ノ meaning ハ intellect ノ law ニ逆ハズシテ logical requirement ヲ fulfil スルコトナリ (小説ノ chapter 杯デ character ノ evolution ガ自然ナリト云フノハ多クノ場合ニ於テ矢張り Empirical ナ intellectual law 即チ今迄ノ experience ヲ sum up セル者ヲ repeat スルガ故ニ natural ナル場合多シ)。又 logical sequence ノ自然ナルハ Mathew Arnold ノ例ヲ見ルベシ

2) Emotion ノ law ニ逆ハズシテ之ヲ fulfil スル order ナリ。one sentence ト next sentence ノ relation カラ生ズル emotion ガ hitch ヲ感ゼヌ場合ナリ。此場合ニハ logical sequence ヲアル程度迄 neglect スルヲ得。アル Poem ノ如シ

○ Paragraph ニモ evolve セザル者アルカ? 矢張り只ニ連續セル者ニテ intellectual ニモ emotional ニシ relation カラ pleasure ノ生ゼヌ者モアリ得ベシ。即個々ノ sentence 文ノ emotional or intellectual value ヲデモツ者。Carlyle 又 Emerson ノ如キハ其例。

- Greek の *Symmetry* を重んずる議論。Aristotle の *Plot* に重きを置ける議論 参考
- Addison の *Imagination* に appeal するト云フ criticism (Locke の Association of Ideas 参照)
- Aristotle の *Plot* と relation に過ぎず而も action の relation ナリ。又 aim アル action の relation に過ぎず。

断片

——明治四十一年初夏以降——

- Gathering
 - Portrait
 - Theatrical performance
- 宮籠り。御稻荷様籤
ani movement

解
說

目
次
第一章 緒言
第二章 概論
第三章 經濟學之基礎
第四章 經濟學之發展
第五章 經濟學之應用

『日記及断片』解説

『吾輩は猫である』の猫は、主人の苦沙彌先生が日記をつける所を見て、「猫はそこへ行くと単純なものだ。食ひ度れば食ひ、寐たければ寐る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶體絶命に泣く。第一日記杯といふ無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人の様に裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れないが、我等猫屬に至ると行住坐臥、行屎送尿悉く眞正の日記であるから、別段そんな面倒な手數をして、己れの眞面目を保存するには及ばぬと思ふ。日記をつけるひまがあるなら椽側に寝て居る迄の事さ。」と罵倒した。必しも猫と意見を同じくしてゐた譯でもあるまいが、漱石は平生あまり日記をつけなかつた。つけてもそれは、「世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する」爲の日記ではなくて、寧ろ、自分の見聞を記録して、後日の用に備へる爲の日記であつた。漱石は、自分が何所かに旅行をするか、それでなければ、もうそろそろ小説を書く

説解

準備をしなければならぬといふやうな場合でない、日記をつけてゐないのである。漱石は、その目的の爲に印刷され製本された、常用日記のやうなものを、殆んど用ひてゐない。それは、明治三十四年の英國製のそれと明治四十二年の日本製のそれと、たつた二冊あるきりである。あとは凡て手帳に書かれる。手帳は、およそ四六判三冊、菊半裁判四冊、袖珍判二冊、合計九冊である。この事が既に、ある意味からいふと、漱石が日記を丹念につける事に、特別の興味を持つてゐなかつたといふ事を、物語つてゐるのではないかと思ふ。

最初の、明治三十三年九月八日から十二月十八日までの日記は、言ふまでもなく、漱石が英國へ留學する途中と、船をナポリに棄ててジェノワからパリに入り、パリからロンドンへ著き、其所に暫く住んでゐた時分の日記である。ロンドン滞在中の日記は、再び、翌明治三十四年一月一日から十一月十三日に互つて書き綴られる。漱石は、更にもう一年ロンドンに滞在し、明治三十五年十二月五日、其所を出發して歸朝の途に就くのであるが、然し三十五年に入ると、漱石はもう日記をつけなかつた。歸朝の途中の日記もない。歸朝して東京に住み、大學と高等學校とに教鞭をとるやうになつてからの日記もない。明治三十五年以降の三四年間は、日記など到底つけてゐられないくらし、漱石は切迫した生活氣分に坐してゐたやうである。

明治四十年三月二十八日から四月十日までの日記は、明治三十八年から創作活動を始めた漱石

が、大學と高等學校とをやめ、朝日新聞に入社した上で、ほつとした氣分になつて、京都に遊びに行つた時の日記である。漱石はこの時、あなたがち小説の種を探す氣で、出かけて行つた譯でもなかつたのだらうと思ふ。然しその旅から歸つて来て、初めて新聞に書いた『虞美人草』の中で、漱石はこの旅の見聞を、例へば甲野さんと宗近さんとの、叡山登りや保津川下りなどの材料として使つてゐる。明治四十二年三月二日から八月二十八日までの日記は、是からそろそろ『それから』が書かれようとする時分の日記である。従つて『それから』には、この日記に書き留められた事が、可也多く、材料として用ひられる。高商事件・日糖事件・『煤烟』・『七刑人物語』・君子蘭・鈴蘭などが、それである。更に空想を逞しうすれば、漱石がこの日記の中に、『歌麿のかいた女はくすんだ色をして居る方が感じが好い』と書き込んでゐる、『艶節屋の御上さん』は、或は『それから』の三千代の姿を纏め上げる、原動力になつてゐるのではないかとさへも思はれる。明治四十二年九月一日から十月十七日までの日記は、中村是公の勧誘によつて、漱石が滿韓を旅行した時の日記である。是は、その一部分が、『滿韓ところん』となつて現はれた。明治四十三年六月六日から七月三十一日までの日記は、漱石が『門』を書き了へてから、胃の工合が悪い爲に、長興胃腸病院に出かけて診察を受け、到頭入院と決定し、入院するから退院するまでの、日を記述した日記である。六月六日は、漱石が、胃腸病院へ診察してもらひに行つた最初の日で

あり、七月三十一日は許されて退院した日であつた。漱石は、退院してから、醫者の勧めで、修善寺に轉地する。然もその轉地先で漱石は、再び胃痛に悩み、竟に大吐血して倒れ、二ヶ月近くの間病床に釘付けにされ、徐徐に回復すると、擔架で汽車に運ばれて新橋に著き、擔架で胃腸病院にかつき込まれて、其所で越年する。明治四十三年八月六日から明治四十四年二月二十一日までの日記は、その修善寺へ向けて出發する日から始まつて、胃腸病院を退院（二月二十六日）する数日前まで續いた日記である。是は、漱石の精神生活の發展の上から見ても、また一般的な意味でのヒューマン・ドキュメントとして見ても、貴重な資料たる事を失はない。漱石はその一部を——大吐血を中心として、その前と後との自分の心的状態の詳細を——『思ひ出す事など』で報告した。

明治四十四年五月九日から十二月十五日へかけての日記は、漱石の親戚の結婚披露の席の描寫から始まつてゐる。是も恐らく漱石が、病氣で長い間小説を書く事を怠つてゐたあと、もうそろそろ小説の支度にとりかからなくてはならないと思ひ、何かの材料に使ふ氣で、この日を機會に、日記を書き始めたものに違ひない。間もなく漱石は、自分の所で世話をしてゐた西村濤蔭の妹をお嫁にやる事にする。その結婚と前の親戚の結婚とは、非常な對照をなす結婚である。その對照が漱石の心を牽いたのか、この婚禮も漱石は、可也詳細に日記の中に書きつける。六月に入ると、

漱石は、雅樂演奏の拜觀に出かけた。是も相當事細かに書き留められる。さうして是は、後に『行人』で、三澤が自分の妻君の友達を、二郎に紹介する場面として、利用された。——この日記に書かれてゐる事は、後の『行人』の材料として随分多く利用されてはゐるが、然しなんと云つても、最も多く利用されてゐるのは、明治四十五年一月一日から四月二十九日へかけて發表された、『彼岸過迄』の中である。『彼岸過迄』の中の『雨の降る日』の骨子をなすものは、殆んど全部この日記の中に書き留められてゐると、言つて可い。そのみではない。『風呂の後』の森本が、北海道で經驗する話も、全部この日記の中から出てゐる。『須永の話』の須永が、鎌倉で見る景色も、千代子の家族と船に乗る一仕始終も、或は『松本の話』の中の、須永の旅先からの便りも、大抵この日記の中から出てゐる。この日記の最後の日、十二月十五日の部に、「今日から小説を書かうと思つてまだ書かず。他から見れば怠けるなり。終日何もせざればなり。自分から云へば何もする事が出来ぬ位小説の趣向其他が氣にかゝる也」とあるのは、言ふまでもなく、『彼岸過迄』の事である。

明治四十五年五月から大正元年十月五日へかけての日記は、『彼岸過迄』の次の小説に備へるための日記であつた筈である。然しこの日記で『行人』の材料となつたものは、鎌倉に漱石がその夏借りた材木座の別荘の景色ぐらゐなもので、その大部分は、前の日記から採り上げられた。是

は漱石が、前年、即ち明治四十四年の八月、大阪朝日新聞から頼まれて、和歌山・明石・堺・大阪と、關西を講演してあるいた時の見聞が、使はずに置くのは惜しいほど、澤山あつたせひではなかつたかと思はれる。「行人」の一郎一行が和歌山に遊びに行く所、二郎とお直とが和歌の浦で暴風雨の一夜を宿屋の一室で明かす場面、三澤が胃潰瘍か何かで病院に擔ぎ込まれ、其所で長い間寝てゐる大阪の病院生活、さういふものは凡て漱石が、この講演旅行で経験したものを、それそれ適宜にモンタージュを試みたものに外ならない。この日記が役に立つたのは、ずつと飛んで、最後の『明暗』の場合である。「明暗」では、主人公の津田が、痔瘻を切開してもらふ爲に、専門の病院に入院する。さうして『明暗』では、その津田の入院中に、事件がいろいろに展開する。その切開と切開後の経過と入院中の周囲の光景とを、漱石はこの日記に書き留めてある、自分自身の経験からとつて來た。——もつとも漱石は、その前年、明治四十四年の秋にも、暫く同じ病院に通つてゐたのである。従つて『明暗』の材料となつたものは、必ずしも大正元年の経験だけに限られた譯でもなかつたが、然し漱石が其所に入院したのは、大正元年だけである。日記にはその時の事が、相當精しく書いてある。

その後日記は、暫くとぎれる。漱石は、大正元年十一月三十日から『行人』を書き始めたが、大正二年三月末に胃潰瘍に倒れ、二ヶ月以上外出する事の出来ない状態に置かれて、一時『行人』

を書き續ぐ事を断念しなければならなかつた。「行人」續稿としての『塵勞』が、新聞に掲載され始めたのは、同じ年の九月十六日であり、掲了になつたのは、十一月十五日である。大正三年には、四月二十日から八月十一日に亘つて、『心』が掲載される。その合間合間を、漱石は多く書をかき、晝をかいて暮した。然も漱石によれば、漱石は小説や脚本は「刺戟が強烈」で、「實生活ノ反映としてウンザリ」する、さういふものを見たり讀んだりしてゐると、「心に餘裕ガナ」くなり「従つて不安」になり、「俗ツボ」くなくなつてしまふから、それでさういふものから離れて、「自由、安穩、平和を求める」爲に晝をかくといふのだから、自然漱石は、日記をつけるといふやうな事に、あまり氣が向かなくなつたのではないかと思はれる。日記をつけるとなると、勢ひ人事にも多く頭を向ける傾向が出て來るからである。もつとも漱石は、大正四年には、三月十九日から二十九日へかけて、日記をつけてゐる。是は、漱石が『道草』を書き出す前、京都に遊びに行つた時の日記である。然し漱石のこの時の心持は、どつちかと言へば、そのうち厭でも小説の事に頭を使はなければならぬのだから、今のうち、さういふ事から離れて、暢氣に頭の洗濯をして來たいといふ點にあつたと思はれる。少くとも『道草』では、この時の見聞は、「鳥鳴く。何ぞと聞けばチンチラデンキ皿持てこ汁のまじよ。」といふ、暢氣な一句が、漱石が長野に行つた時に見た「元祖藤八拳指南所」といふ看板の話とともに、暢氣な比田の暢氣さ加減を表現する

手段として、たつた一つしか使はれてゐないのである。大正四年十一月九日から十七日頃までの日記は、『道草』をかいてしまつたあとで、漱石が中村是公と一緒に、湯河原に遊びに行つた時の日記である。大正五年一月二十八日から二月十六日までの日記も、同様であつた。この時漱石は、前年の暮から腕が痛んで、原稿を書くのに困難を極めた爲に、大正五年の元日から新聞に載り出した『點頭録』を、書きさしたままで、中村是公の行つてゐる、湯河原に轉地した。『明暗』の津田が、自分の過去の戀人である清子を訪ねて、ある温泉場へ出かけて行く、その温泉場といふのは、或はこの湯河原に舞臺がとられてゐるのではないかと思ふ。

漱石の「日記」は、非常に詳細を極めた部分もないではないが、概して言へば、極めて簡單で、ほんの心覺えを簡條書きにしてゐるやうな箇所が、随分多い。然しその簡條書きのやうなもので、漱石といふ人間を頭の中に置いて、凝と眺めてゐさへすれば、津津として盡きない味が、あとからあとから湧いて出て来る。殊にそれが、漱石の作品の中に材料として用ひられてゐる場合、それと作品の中のものとの比べて、漱石がそれを如何に描き出し、又それを如何なる場面に如何に利用してゐるかを知らうとするならば、人はそれによつて、漱石の物の把握し方を知り、把握したものを利用するし方を知り、また一般に小説を構成する場合の、漱石の頭の働き工合を

知り、この「日記」を更に面白く讀む事が出来るに違ひないのである。例へば、明治四十四年八月十五日に、漱石が和歌の浦で経験した暴風雨の一夜が、『行人』の中でどう使はれてゐるかを、比較して見るのでも可い。大正元年九月に漱石が、神田錦町の佐藤病院で経験した事が、『明暗』の中でどう使はれてゐるかを、研究して見るのでも可い。もしくは、滿韓旅行の日記と『滿韓ところく』とを、修善寺の日記と『思ひ出す事など』とを對照して見るのでも可い。「日記」を絶えず漱石の作品との關聯に於いて讀むといふ事は、漱石その人を理解する上のみならず、漱石の作品を理解する上にも、亦必要な事たるを失はない。

もつとも漱石の「日記」の面白味は、單に漱石の作品との關聯の上のみあるのではなかつた。漱石の「日記」は、そんなものから全然離れても、それ自身獨特の美しさや深さを持つてゐる。多少の誇張を施して言へば、此所には漱石を動かしたものが、最も直接的な、最も單的な、最も自由な形で表現されてゐるだけに、漱石の漱石らしい美しさも深さも、最も直截に、最も潑刺に、動いてゐるといふ事も出来るのである。例へば漱石の自然愛である。漱石は、子供の時分から、切に自然を愛し、殊に晩年には、「世の中にすきな人は段々なくなります、さうして天と地と草と木が美しく見えてきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます」とまでも言つてゐるが、その自然の美しさに躍る漱石の心が、「日記」の到る所に現はれる。

——「雛を賣る店。櫻の作り花。鯛と榮螺と蛤を籠に盛りて青き笹を敷きたるが魚屋の店にあり。赤く塗つた蒲鋒も澤山並んでゐる。花屋が赤い桃の花を竹の筒に挿してゐた。室咲と思ふ。梅しきりに咲く。」(四二・三・二)——「○雨晴、透き通る様な空なり、湯殿の擦硝子に昨夜の湯氣が露になつて凝り付いてゐる。下に蠅が一匹靜肅にとまつてゐる。硝子の欠けた隙間から櫛の若葉が見える。其葉の茂つた間から青空が見える。二つのあざやかな色が判然區別される。意識の明確になる朝である。」(四四・五・三一)——「麴町の花屋でみづ／＼しきあやめを桶にすい／＼と入れてあつた。」(四三・六・六)——「○神坂坂に虫屋が荷を出してゐた。長さ一間位の荷の上を屋根の様にして前に暖簾をかけてゐる。黒い中に白で字が染め出してある。眞中に山の下へ越の字其左右に虫の名が並べてある。松虫、鈴虫、轉虫……中には籠が一杯ある。扇の形、舟の形、鳥籠の形、紫のひもで括つたものや、緋の紐で結ひたもの、夫から家の形に出来たもの、虫屋は其下に腰を掛けてゐる。殆んど足を動かさず事さへ出来ない。」(四四・七・九)——「○雲出づ。白い雲が薄く濁つた中かに、微かに赤みを帯びてゐる。その奥には紫の匂も見える。敷は切れる様に續がる様に澤山であつた。其背景たる青空もつや消しである。暖かく藏れてゐる。凍えたぎら／＼したものではない。嫩雲である。」(四三・七・二〇)——「○漸く秋の風を聞く。肌にも秋の風と感ぜらる。芭蕉猶青くさら／＼と鳴る。裂けながら鳴る。梧桐は殆んど片葉をと

とめず。」(四四・一一・二七)——普通の人には、なんでもない事として見過され勝ちな、庭前・街頭の光景が、愛する漱石の光を受けて、見違へるやうに美しく、眼の覚めるほど鮮やかに、我我の眼の前に現はれる。漱石を楽しくした自然は、漱石が楽しんだ事によつて、我我を楽しくするのである。

かういふ漱石が、花鳥風月の趣に乏しいロンドンに住んで、いかに落寞たる生活を送らなければならなかつたかは、想像に餘りある事である。漱石はロンドンにゐて、「句あるべくも花なき國に客となり」といふ句を作つてゐるが、明治三十三年から明治三十四年へかけての漱石の留學日記は、その「花なき國に客とな」つてゐる事の侘しさに、充ち充ちてゐる日記であつた。「倫敦ノ町ニテ霧アル日大陽ヲ見ヨ黒赤クシテ血ノ如シ、鶯色ノ地ニ血ヲ以テ染メ抜キタル太陽ハ此地ニアラズバ見ル能ハザラン。」(三四・一・三)などといふのが、それである。それが如何に漱石に不愉快な印象を興へたかは、それから十年後、明治四十四年十一月二十八日の日記に漱石が、「曇。どんよりして陰氣からすくめられる様な天氣である。冬の近づいた氣分である。曇る中大陽が薄く見えるのを眺めると倫敦の時候を思ひ出す。夫でも大陽が毒血の様な色をしてゐないのが、まだ荒涼の感を柔げる。空氣の臭も少し違ふ。」と書いてゐるのを見ても、知れる。然もロンドンで漱石を侘しくしたのは、單に霧と煤烟とのみではなかつた。日記の中には、「先達て

Crab 氏に雪は好きかと尋ねたら大嫌ひだと答へた何故と云たら泥がきたないと云つた泥は誰も好くまいが雪は poet ノ愛するものだと答へてやつた Crab は頻りに nature を云々する男だ」(三四・二・九)といふのもあれば、「家の者共は犬ノ共進會を見に行た悪い天氣デ雪が降つて居る、當地のものは天氣を氣にかけない禽獸に近い」(三四・二・一三)といふのもあり、また「西洋人ハ執濃イヲガスキダ華麗ナヲガスキダ芝居を觀テモ分ル食物ヲ見テモ分ル建築及飾粧ヲ見ニモ分ル夫婦間ノ接吻や抱キ合フヲ見テモ分ル、是ガ皆文學ニ返照シテ居ル故ニ洒落超脱ノ趣ニ乏シイ出頭天外シ觀ヨト云フ様ナ様ニ乏シイ又笑而不答心自閑ト云フ趣ニ乏シイ」(三四・三・一二)といふのもある。ロンドンには庭前・街頭に漱石の眼を樂しませるものもなければ、つき合つて心を樂しくする風雅な人間もゐなかつたのである。勿論漱石といへども、或はデンマーク・ヒル附近を散歩して「聊か風雅の心を喚起するに足る」(三四・一・一〇)と感じたり、或はダリッチに畫廊を見に行つて、「此邊ニ至レバサスガノ英國モ風流閑雅ノ趣ナギニアラス」(三四・二・一)と言つたりするやうな事もないではなかつた。然し葦の芽の青いのを見るにも、桃の花の蕾んでゐるのを見るにも、チューリップが頭を擡げてゐるのを見るにも、わざわざ遠い道のりがあるいて、その場所へ行くのでなければ、自分の庭先では、もしくは一寸往來をあるいただけでは、到底さういふものを見る事の出來たいやうなロンドンである。さういふ所に住んで漱

石が、自分は自分のエレメントにゐると感じ得る筈がない。

漱石は、明治三十四年の七八月以降は、十年計畫で「文學論」を著述する事の一念を發起して、下宿屋の一室に立て籠つた。日記も七八月以降は、極めて事務的なものとなり、それも十月十三日を期として、全然消えてしまふ。然も漱石にとつて、集中してこの一念に仕へれば仕へるほど、居ながらにして眼を放せば、すぐ其所に、自分を樂しませてくれる草や木が、もしくは晴れた空や暖い光が存在してゐるといふ事が、どんなに必要な事であつたか。然しロンドンの場末の下宿では、さういふ事は到底望まらるべくもない。かうして漱石は、一つには、劇烈な神經衰弱に罹るのであるが、然し一方から言へば、漱石がロンドンに住んで、「花なき國に客とな」る事の味氣なさを、泌泌體驗したればこそ、漱石は、自分の日本人としての立脚地を確立し、例へば『草枕』のやうな、純日本的な——もしくは純東洋的な立場から、在來の一切の小説にアンティテーゼを置くやうな、破天荒な小説を書く氣にもなつたのだと、言へなくもないのである。『草枕』のみではない。漱石は、假令どんな種類の小説を書いても、最後までこの立脚地を——寧ろ晩年になればなるほど、この立脚地を護つて、その方向に自分の世界を高めて行く事に精進した。然もそれは、漱石の自然に對する、心からなる愛著を閑却しては、到底理解する事の出來ない立脚地である。漱石の自然に對する、心からなる愛著は、明治三十三年以來、漱石の「日記」を貫ぬいて

流れる、一つのライトモーターであつた。

他の一つのライトモーターが、漱石の人間に對する深い關心であつた事は、今更説明するまでもないであらう。さうして、是なしには、作家としての資格が到底成立し得ない事も、亦言ふまでもない事である。漱石はロンドン留學當時の日記に於いて、既にその事をはつきり示してゐる。——「彼等ハ人ニ席ヲ讓ル本邦人ノ如ク我儘ナラズ／彼等ハ己ノ權利ヲ主張ス本邦人ノ如ク面倒クサガラズ／彼等ハ英國ヲ自慢ス本邦人ノ日本ヲ自慢スルガ如シ／何レガ自慢スル價值アリヤ試ミニ思ヘ」(三四・一・三)——「西洋人ハ日本ノ進歩ニ驚ク驚クハ今迄輕蔑シテ居ツタ者ガ生意氣ナリヲシタリ云タリスルノデ驚クナリ大部分ノ者ハ驚キモセテバ知リモセヌナリ眞ニ西洋人ヲシテ敬服セシムルニハ何年後ノコヤラ分ラヌナリ土臺日本又ハ日本人ニ一向 *inferior* ヲ以テ居ラヌ者多キナリツマラヌ下宿ノ爺杯ガ日本ヲ *appreciate* セヌノミカ心中輕侮スルノ色アルヲ見テ自ラ類リニ法螺ヲ吹キ己レ及ビ己レノ國ヲエラソウニ言ヘバ云フ程向フハ此方ヲ馬鹿ニスルナリ是ハ此方ガ立派ナリヲ云ツテモ先方ノ知識以上ノコトヲ言ヘバ一向通ゼヌノミカ皆之ヲ *conceit* ト見倣セバナリ黙ツテセツ／トヤルベシ」(三四・一・二五)——「夜下宿ノ三階ニテツク／日本ノ前途ヲ考フ」日本ハ眞面目ナラザルベカラズ日本人ノ眼ハヨリ大ナラザルベカラズ」(三四・一・二七)——「日本ハ三十年前ニ覺メタリト云フ然レドモ半鐘ノ聲デ急ニ飛び起キ

タルナリ其覺メタルハ本當ノ覺メタルニアラズ狼狽シツ、アルナリ只西洋カラ吸收スルニ急ニシテ消化スルニ暇ナキナリ、文學モ政治モ商業モ皆然ラン日本ハ眞ニ目ガ醒ネバダメダ」(三四・三・一六)——「英人ハ天下ノ強國ト思ヘリ佛人モ天下ノ強國ト思ヘリ獨乙人モシカ思ヘリ彼等ハ過去ニ歴史アルコトヲ忘レツ、アルナリ羅馬ハ亡ビタリ希臘モ亡ビタリ今ノ英國佛國獨乙ハ亡ブルノ期ナキカ、日本ハ過去ニ於テ比較的ニ満足ナル歴史ヲ有シタリ、比較的ニ満足ナル現在ヲ有シツ、アリ、未來ハ如何アルベキカ、自ラ得意ニナル勿レ、自ラ棄ル勿レ默々トシテ牛ノ如クセヨ致々トシテ鶏ノ如クセヨ、内ヲ虚ニシテ大呼スル勿レ眞面目ニ考ヘヨ誠實ニ語レ摯實ニ行ヘ汝ノ現今ニ播ク種ハヤガテ汝ノ收ムベキ未來トナツテ現ハルベシ」(三四・三・二二)——勿論西洋に行つた者は、誰でも大抵は、西洋と日本との比較に於いて、日本人としての世界に於ける自分の立場を自覺し、其所から日本の現在を考へ、また日本の未來を考へ、日本人はこの間に處して、果してどうすべきであるかを考へるものである。従つて漱石がロンドンに住んで、日記の中にかういふ事を書き込んでゐる事は、別に漱石にとつて異とするに足りる事でもなんでもなかつたのかも知れないが、然し漱石がロンドンで獲得した自覺と覺悟とは、漱石がロンドン留學を卒へて日本に歸つて來ても、また日本で創作に従事し出してからも、些しも動搖する事がなく、其所から絶えず日本を批評し、其所から日本人に働らき掛ける事を、決して懈る事がなかつ

たのである。その最も適切な一例は、漱石が明治四十四年八月十五日和歌山で試みた講演『現代日本の開化』であつた。そのみではない。『猫』でも『虞美人草』でも『三四郎』でも『それから』でも、凡そ漱石の修善寺大患以前の作品は、その中にさういふ批評を含んでゐない作品はないと言つても、少しも過言ではないのである。

然し漱石の人間に對する深切な關心は、西洋文化對日本文化、西洋人對日本人といふやうな、大きな問題のみとして現はれてゐるのではなかつた。例へば漱石はその「日記」の中に、「出齒龜。田子浦入水親子三人脊髄病。／本所小女二人同時入水。／中尉。副官ヲ斬ル（戀ノ恨）／建部博士離縁。／大久保臀肉斬取事件。／長一寸八分幅一寸二三分厚五分位ノ電降ル（六月八日）／姪婦震死。（眞鍮ノカンザシ）／四十二ト三十九ノ夫婦情死。美貌ノ妻強姦セラル。其事評判トナル。夫ノ嫌疑。妻ノ慰撫。情死。」（四一・六）などといふ、恐らく當時の新聞の社會面で報告された記事を、一括して記録してゐるかと思へば、「〇一日の新聞（大正五年三月十八日）／電報。廣西獨立宣言（上海特電）／獨乙海相交迭（ロイテル）／×經濟會議參列者を阪谷芳郎男にきめたといふ事。阪谷男の意見。歐洲戰爭の經濟狀態に及ぼす影響につき。一年二年の間に千億の軍費を要するが如き經濟上の大事件を適當に始末するため救濟善後策の必要あり。それから敵國苛めの案件もあり。／×英艦が日本の商船を頻々臨檢する事につき解決如何、（我國法律上の）……

／以上箱中にあり。／通讀すると一項から一項へ心が段々變つて行く。讀了の後 はあ心が色々
の經驗をしたなと思ふさうして其經驗に切目がなくてさうして變化が多い。變化の多い事といつ
たら考へると大變なものである。此繼目のない多大の變化を経過した心は「是で何分かゝつたら
う」と思ふ。」といふ風に、刺激に充ちた新聞記事に反應する、自分の心を反省し、或は「昨夜子
供が活動寫眞を見に行つたら、蘆花の不如歸をやつたさうだ。さうしたら常子が泣いたさうだ。
常子は九つである。どうして泣けるか不思議でならない。」（四二・七・四）と、子供の心理の不
可思議に注意するかと思へば、「えい子が二三日前八つ位の學校友達を連れて來た。其子が御辭
義原をするから、へい入らつしやいと云つた。あとから二人遊んでゐる所へ行つて、あなたの御父
さんは何をして入らつしやるのと聞いたら御父さんは日露戰爭に出て死んだのとたゞ一口答へた。
余はあとを云ふ氣にならなかつた。何だか非常に痛ましい氣がした。」と言つて、子供から自分
の輕佻な態度を、たしなめられたやうに感じた記事もある。その他男女間の戀愛に關する問題な
どは、その種種相を盡して、數限りもなく書き留められる。もつとも是は、割合から言へば、「日
記」よりも「斷片」の方が遙に多い。「日記」に書かれた「ある腰辨出張の前ある待合に行き素
人を注文す。主婦よろしいと云つて寫眞を見せる。其中に自分の妻君の寫眞あり。主婦曰く此人
〇日から〇日迄でなければ御意に應ぜずと腰辨腹の中で計算して見ると丁度自分の出張する間の

日取也」(四五・六)といふやうな話は、漱石を非常に動かしたものと見えて、その後の「断片」では、二ヶ所に互つて、この事が書き上げられる。その一つ、大正四年十二月ごろから大正五年七月二十七日までの「日記及断片」の中では、漱石は「○細君賣淫の話」と題して、「私はそれをKから聴きました。それからといふものはどうしても女を信ずる事が出来なくなりました。」とさへも書いてゐるのである。

『日記及断片』の「断片」といふ名前は、外に適當な言葉がなかつた爲に、断想・感想・覚え書・控・その他いろいろに名づけられ得るものに與へた、假の名前に過ぎない。其所には、漱石の感想がある。人から聽いた身上話の聞書がある。自分の書かうと思つた、論文もしくは小説の筋書がある。不圖思ひついた警句や、小説のある場面の控がある。他人の作品を讀んで、考へた批評もあれば、印象の深かつた他人の作品の一節もしくは一句を、抜き書きしたものもある。さうして是は、それだけを書く爲の手帳相判一冊、菊判裁判一冊、袖珍判一冊に、左からと右からと書かれたものもあれば、「日記」用の手帳の、反對の側に書かれてゐるものもある。明治三十七八年ごろまでのものは、漱石が講義用のノートを書いてゐた、相判のフールスキップ三十三枚、その他雑多の大きさの紙八枚に、ばらばらに書かれてさへもゐる。(本文校了後に發見された「断

片」は、同じやうに相判のフールスキップその他に書かれて、十八枚に及んでゐる。是は「補遺」として卷末に追加された。「断片」は、言はば、漱石の、年月日を伴はない、内面生活の「日記」である。漱石の「日記」が、多く外に動いてゐるもの、の見聞を記録してゐるに反して、是は多く漱石の内に動いてゐるものに姿を與へたものである。漱石は「日記」をつけてゐる期間でも、「断片」は「断片」として、別な所へひとかたまりに書く事にきめてゐたやうにも見える。従つて是は、ある意味から言へば、「日記」よりもより多く、「世間に出されない自己の面目を暗室内に發揮する」傾向を持つてゐるものである。殊に明治三十七八年のころに、英文で書かれたものの中には、もし是が日本文で書かれてゐたら、恐らくかうは思ひ切つて書かれなかつたに違ひないと思はれるほど、激越の情を吐露したものもある。

「断片」が「日記」と同じやうに、漱石の英國留學前後よりも、留學から歸つて東京に住んだ後、特に漱石が明治三十八年に小説を書き出してから、頓にその分量を増してゐる事は、言ふまでもない。然も當時漱石は「日記」をつけてゐなかつただけに、漱石がまだ朝日新聞に入社しない前、是から『猫』を書かうとし、もしくは一方では『猫』を書き続けつつ、一方では短篇小説をそれからそれへと發表してゐる時分の「断片」の分量は、他の時期に比べて、比較にならない位に多いのである。漱石は、半べらの白紙や手帳の碁盤罫を、片端からペンで書き埋める事によ

つて、自分の鬱勃たる胸中の磊塊を、纒に寛ろげてわたものらしい。其所には、英文で書かれた、戦闘的な感想がある。日本文で書かれた同性質の、然し多少柔げられた、感想がある。さうかと思ふと、『猫』を思ひ出すやうな、巫山戯きつた、ノンセンスな饒舌がある。もしくはその『猫』に用ひられた種の列擧がある。『猫』十一に用ひられた、文明論と神経衰弱論とがある。『野分』の中の白井道也の論文と演説との下書もある。さうかと思ふと、『坊つちやん』のうらなり送別會の席上で藝者が唄ふ、歌の記録もある。——勿論是は、後にはその目的の爲に、それぞれその場所一括された爲でもあるに違ひないが、『日記』よりも遙に多く、漱石の作品と、密接な關係を持つてゐるのである。

事實漱石の「断片」を、漱石の作品との關聯に於いて讀むほど、興味の深い事はないと言つて可いかも知れない。中でも興味が高いのは、明治三十七・八年のころと推定される、一群の「断片」の中の、第五・第六・第七である。是は結局私一己の想像に過ぎないのかも知れないが、これら第五・第六・第七は、必ず漱石の「猫」以前のものであり、然も漱石の「猫」は、かういふ階段を幾度か上り降りした後、今日我の眼の前にあるやうな姿に纏まり上がったもの——従つてこれら第五・第六・第七は「猫」の胎生學的發展の跡を示すものに外ならないからである。

「断片」第五には、「それに近頃帝國文學へマクベスの幽霊と云ふをかけた所が大變評判がい

ゝです」といふ言葉があり、また「セルマの歌でも出れば善う御座んすがね」といふ言葉がある。漱石の『マクベスの幽霊に就いて』は、明治三十七年一月號の『帝國文學』に掲載され、オシアンの翻譯『セルマの歌』は『カリツクスウラの詩』とともに、明治三十七年二月二十日發行の『英文學叢誌』第一輯で發表された。従つてこの「断片」は、恐らく明治三十七年の一月末か二月のころ、もしくはそれを距る事あまり遠くない時分に、書かれたものと推定して可いに違ひない。然も千駄木時代の漱石は、劇烈な神経衰弱に悩まされ、自分の家の向うの下宿屋から聞こえて來る聲を氣にして、屢其所の書生を怒鳴りつけてゐたと言はれるのだから、是は恐らく漱石が、さういふ疍癢の起つてたまらないある日、その疍癢に風を入れるために、神経をびりびりさせながら書いて行つたものに相違ないのである。既に漱石はこの「断片」の書き出しに、「我輩の向ふの家は〇〇〇といふ書生の合宿所がある此書生等は日常我輩の疍癢を起して大聲を發するのを謹聽するの榮を得る果報者である時として先生の假聲杯を使つて我輩を驚かしめる其所に女の召使か何かゞ居つて此書生と二人假聲を使ふ其標本を一寸諸君に御紹介する、」と書いてゐる。然も此所には「我輩」といふ言葉が用ひられてゐるのである。

「断片」第六には「新體詩」といふ見出し様のものがあつて、いきなり「僕は新體詩を作つたから見てくれ給へ從軍行と云ふのだ帝國文學へ投書したから今に出るだらう」と書き出してある。

漱石の『從軍行』が『帝國文學』に載つたのは、明治三十七年五月の事である。従つてこの「斷片」が書かれたのは、恐らく明治三十七年の四月か五月の初めであつたと考へて可いであらう。然も此所には既に、『猫』の迷亭を思ひ出させる、饒舌があるのである。殊に相手のおひやかしを眞に受けて、「なにそんなに名句の積りでもないのさその位な事は朝食前の藝さ」と返事をする所など、第一讀本の名文『巨人引力』を翻譯したといふ苦沙彌先生と、それを、とんだ所でトチメンボ一の御返禮に預かつたと言つて恐縮する迷亭との對照が、——『猫』全體を貫ぬいて流れる、苦沙彌先生と迷亭との對照が——此所で既にはつきり把握されてゐると言つて可いであらう。のみならず此所の「先づ是等は進めや進めと敵は幾萬の間に寐轉んで居て此日や天氣晴朗と來ると必ず一瓢を腰にして瀧の川に遊ぶ類の句だね、……」といふ形容は、後に發展して『猫』第三の「奥さん、月並と云ふのはね、先づ年は二八か二九からぬと言はず語らず物思ひの間に寐轉んで居て、此日や天氣晴朗とくると必ず一瓢を携へて墨堤に遊ぶ連中を云ふんです」といふ、月並に關する、迷亭一流の定義となつてゐる。

「斷片」第七は、「K君は近頃頻りに水彩畫の稽古をして居る彼に對して丹青の天才なる稱號を呈するは其畫を一分でも見た以上何人も蹶踏する次第であるが彼は其技に熱心なりと云ふ點に於ては何人も首肯せざるを得ない」といふ言葉をもつて始められる。さうして此所には、そのK君

が友人B君の所へ行つて、「天に星辰あり地に露華あり飛ぶに禽あり走るに獸あり……」と言つたといふアンドレア・デル・サルトの言葉を聽いて來て、猫の寫生を始めたたり、車屋の子の八つちやんに五錢やつて、モデルになつてもらつたりする所が書かれる。漱石が水彩畫をかき出したのは、明治三十六年の事である。然し『書簡集』で見ると、漱石は明治三十七年の夏から明治三十八年の二月ごろへかけて、最も盛に人人に、自筆水彩畫の畫葉書を送つてゐる。この「斷片」がいつごろ書かれたものであるかは、想像して見る手懸りもないが、然し是が、明治三十七年の十一月か十二月の初めごろに書かれた筈の『猫』第一よりも、前に書かれたものである事だけは、疑ひを容れない。此所では猫が「吾輩は猫である」と名乗をあげて、主人の棚おろしをするといふやうな形式は、まだ發見されて居らず、漱石はただ、自分でないものの立場に立つて、自分の畫を眺め、それをリディキラスなものとして笑つてゐるのみだからである。然も主人の苦沙彌がいやに熱心に水彩畫をかいてゐる事も、その苦沙彌がアンドレア・デル・サルトの言葉と稱する「天に星辰あり。地に露華あり。……」を友人から聽いて、猫を寫生する事も、『猫』第一の中に、殆んどその中心事件のやうなものとして、描き出されてゐるものだつたのである。

「斷片」第七には、まだその外に、行を改めて、「トリストラムシヤンデーがギボンに忠告して佛國革命史を佛國でかくのをやめて英語で著はした」といふ一句が、記録されてゐる。是は「ト

リストラム・シャンデー」が「ニコラス・ニッケルビー」に變へられただけで、『猫』第一の迷亭の出鱈目として用ひられる。「Aヲ相手にするのは三で以て二を割るが如きものだいつ迄いつても割り切れない」といふのは、「二」が「十」に變へられて、『猫』第二で、雑煮の餅を喰つた猫が、齒にくつついてどうしても離れない餅を形容する言葉として用ひられる。然もその言葉は、迷亭が苦沙彌を批評した言葉だといふ事になつてゐる。「……出来上つた繪を柱へ立て懸けて三歩退いて眺める横から眺め堅から眺める時には逆さにして見る奇體な事にはK君の繪は逆かさにしても眞直にしても印象の點に於て格別の異りはない……」といふのは、別な場合に、苦沙彌先生の勤が悪い事を表現する一例として、『猫』第二に利用されてゐる。

漱石が疝癪が起つてたまらない時に、下らない事、馬鹿げた事、滑稽な事、世の中を茶にしたやうな事を空想して、その疝癪に風を入れようとする習慣を持つてゐた事は、明治三十四・五年頃の「断片」の中に、或は「疝癪玉がセリ上ると後ろから「ヤツツケロ」といふ暴れ者が兩手を出して押原ゲテ居ル其下ニ「茲ガ思案ノシ處ぞ」といふ外山さんの詩體詩然たる奴がぶらさがつて待つた〜といつて居るひつくり返る逆蜻蛉をうつ其内に助の三牧原目邊で大きな太鼓をドン〜と叩く奴がある腹の中を弘道館の道場だと思つて居る」だの、或は「此地ノ small talks 程ツムラナイ者はない内の猫が何疋子を生んだとか御隣りの犬がよく吠えるとか當然の事をさも面白さ

うに仰せられる犬は古往今來吠えるものに相場がきまつて居る犬にして吠えざるは玉の盃底なきが如しといふ位な者さ啞の犬なんか誰も飼ふものはありやしないそれをおやまあ、左様で御さんすかよくねー杯と仰山らしく受けるこんなことを云つて居る内にはや左様なら御機嫌よろしうの時刻が来る切角主人と學問の話を仕様と思つたつて此體裁だからだめな事だ」だのと、書いてゐるのでも知れる。また漱石が、明治三十六年六月十四日菅虎雄宛の手紙や、同じ年の七月三日同じく菅虎雄宛の手紙の中で示してゐるやうな、不愉快極まる生活氣分の只中にゐて、『自轉車日記』などといふやうな、妙な、自分を塵紙のやうに、くしゃくしゃに揉み潰したやうなものを書いてゐるのでも知れる。然も漱石は、明治三十七・八年のころには、一方では、同じ「断片」第二・第三などの英文で、或は「I hate you, ladies and gentlemen. I hate you one and all; I heartily hate you to the end of my life and to the last of your race」と言ひ、「You know me too well, ladies and gentlemen, you try every experiment upon me to satisfy your curiosity and seem to be anxious to know what will become of me. Well, wait and see. I will satisfy you or rather dissatisfy you for I will turn out anything other than that you expect. You presume too much, ladies and gentlemen, to make a man by artificial evolution. Nowadays people speak of atomic evolutions. Atoms may be gener-

ated by evolution. But you ought to know that I am not an atom. I am more ele-

938

mentary than atoms; I am not susceptible of the process of your artificial evolution. I have lost my wife in teaching her a lesson; I am losing my children in teaching a lesson to my wife and her family. I am resolved to lose everything ere I teach them a severe lesson, except my will. It is my will that I assert and before it they shall bow. They shall bow before me as they find in me a heartless husband and a cruel father and an obdurate relative. They shall bow before me when they see their own cowardly behaviour reflected in their own minds. They will hold me as responsible for it. Silly things! Think of the cause and causality.”と言つて、手に觸れるものを片端から叩き斬つてしまひでもしきうな、物凄い權幕を示すとともに、一方では、同じ「断片」の第五・第六・第七はもとより第八・第九に互つて、自分並びに自分の周圍をリディキュラスなものに眺め、それを滑稽として表現し、殺氣立つた自分の心持を柔らげ、竟にそれを『猫』にまで鍊り上げる事に、成功するのである。

同じ「断片」の第十以下は、恐らく漱石が既に『猫』を書き、相當世間的な歡迎を受けた後、『猫』のやうなものでなく、人情がかつた筋のある小説を書かうとして、考へ得た筋なのだらう

と思ふ。然もその第十も第十一も、その骨子をなすものは、技巧の攻撃であり、嘘の攻撃であり、虚榮や生意氣や己惚の攻撃である。その點では、「断片」第二・第三と脈絡する。ただ此所では、彼所で殺氣立つて詰め寄つて行かれたものが、小説の形で、具體化して表現されようとしてゐる所に、相違があるのみである。

「断片」第十二に箇條書きにされてゐるものは、最も多く、明治三十八年二月九日から十八日ごろまでに互つて書かれた、『幻影の盾』の中に用ひられる。「○鏡。胡弓」に寫る」といふのを初めとして、「○コンデンズド、エキスピリエンス」、それと關聯した「○十年の命を縮めて一年とし……一分の間に……」、「○川ノ向カラ舟が出テ近ヅイテ來る」、その他「○以太利亞のく」、
「○楯から抜け出す。純一無雜。夢のセオリー」、「○先祖が北ノ國ノ巨人ト戰ツテ楯ヲ得ル、巨人楯ヲ與フル楯の功ヲ説ク」などといふのは、凡て『幻影の盾』の中に描かれてゐる所のものである。「○反響。パロット、林檎、蜂、空、大地」といひ、「○ルイン」といひ、「○松。針。銀ノ針」といふのも、『幻影の盾』の主人公キリアムが、胡弓の音を聞きながら盾を見詰めてクララに會ふ場面の、一つの覚え書きであつたに違ひない。

この「断片」に限つた事ではないが、一般に「断片」の書き方は、「日記」の場合よりもつと簡單で、ほんの符牒のやうなものが多い。従つてこの符牒を合鍵として、漱石が自分の中の寶庫

から、どんな燦爛たるものを取り出して来るかは、この符牒と漱石が作品に描き上げたものとを

比較して見るのではないと、はつきり想像する事が出来ない。例へば「幻影の盾の由来」である。

漱石は「断片」では、單に「先祖が北ノ國ノ巨人ト戦ツテ楯ヲ得ル、巨人楯ヲ與フル楯の功ヲ説ク」とだけしか書いておないのであるが、『幻影の盾』ではそれが、「汝が祖キリアムは此盾を北の國の巨人に得たり。……黒雲の地を渡る日なり。北の國の巨人は雲の内より振り落されたる鬼の如くに寄せ来る。拳の如き瘤のつきたる鐵棒を片手に振り翳して骨も摧けよと打てば馬も倒れ人も倒れて、地を行く雲に血潮を含んで、鳴る風に火花をも見る。人を斬るの戦にあらず、腦を碎き胸を潰して、人といふ形を滅せざれば已まざる烈しき戦なり。……わが渡り合ひしは巨人の中の巨人なり。銅板に砂を塗れる如き顔の中に眼懸りて稻妻を射る。我を見て南方の犬尾を捲いて死ねと、かの鐵棒を腦天より下す。眼を遮らぬ空の二つに裂くる響して、鐵の瘤はわが右の肩先を滑べる。繋ぎ合せて肩を蔽へる鋼鐵の延板の、尤も外に向へるが二つに折れて肉に入る。吾がうちし太刀先は巨人の盾を斜に切つて憂と鳴るのみ。……われ巨人を切る事三度、三度目にわが太刀は鏝元より三つに折れて巨人の戴く甲の鉢金の、内側に歪むを見たり。巨人の椎を下すや四たび、四たび目に巨人の足は、血を含む泥を蹴て、木枯の天狗の杉を倒すが如く、薊の花のゆらぐ中に、落雷も恥ぢよと許り袴と横たはる。横たはりて起きぬ間を、疾くも縫へるわが短刀

の光を見よ。吾ながら又なき手柄なり。……巨人は云ふ、老牛の夕陽に吼ゆるが如き聲にて云ふ。幻影の盾を南方の豎子に付與す、珍重に護持せよと。われ盾を翳して其所以を問ふに黙して答へず。強ひて聞くと、彼兩手を揚げて北の空を指して曰く。ワルハラの國オヂンの座に近く、火に溶けぬ黒鐵を、氷の如き白炎に鑄たるが幻影の盾なり。……此盾何の奇特かあると巨人に問へば曰く。盾に願へ、願ふて聽かれざるなし只其身を亡ぼす事あり。人に語るな語るとき盾の靈去る。……汝盾を執つて戦に臨めば四圍の鬼神汝を呪ふことあり。呪はれて後蓋天蓋地の大歡喜に逢ふべし。只盾を傳へ受くるものに此秘密を許すと。南國の人此不祥の具を愛せずと盾を棄て、去らんとすれば、巨人手を振つて云ふ。われ今淨土ワルハラに歸る、幻影の盾を要せず。百年の後南方に赤衣の美人あるべし。其歌の此盾の面に觸るゝとき、汝の兒孫盾を抱いて并舞するものあらんと。……巨人は薊の中に斃れて、薊の中に残れるは此盾なり」といふ、長い、奇しくも美しい、一篇の物語にまで、紡ぎ上げられる。是はアーサーの寶劍の由来にも、またバルツイファルの聖盤の由来にも見る事のない、北歐的なものと南歐的なものとを綱ひませた、新しい傳説の世界である。——同じ事は大正四年の「断片」の中の、『硝子戸の中』の覺え書に就いても言へる。「(1)卯年」「(2)猫」「(3)犬」「(4)或女の告白」「(5)チャブドウ」……と列記してある所を見ただけでは、誰でもそれが『硝子戸の中』の第二を生み、第二十八を生み、第三・第四・第五を生み、

第六・第七を生み、第九・第十を生むだらうとは、豫期する事が出来ないに違ひない。

普通の人は、自分の日記もしくはノートの中に、記憶すべき事項の要點を書き込んでしまふと、多くの場合、書いた事だけしか覚えてゐない。少し時日がたつと、それさへ綺麗に忘れてしまふ。漱石も或は多くの事を綺麗に忘れてしまつたのかも知れないし、またある種の「断片」は、現在筆を執つて書かうとする間に、書く事物を整理する爲に、箇條書にして行つたものも多かつたに違ひないが、それでも漱石は、一般的に言つて、箇箇の事象を實に驚くべき鮮やかさをもつて、はつきり覚えてゐる特徴を持つてゐたやうである。漱石は『行人』の一郎の事を、「事件の断面を驚く許り鮮やかに覚えてゐる代りに、場所の名や年月を全く忘れて仕舞ふ癖があつた。夫で彼は平氣でゐた。」と書いてゐるが、それは同時に漱石自身にあてはまる「癖」であつた。漱石は或は箇箇の事象を綺麗に忘れ去る事があつたとしても、それを思ひ出させる符牒の合鍵がありさへすれば、漱石の記憶の扉はいつでも開かれ、漱石の頭に焚きついてゐる映像は、焚きついた當時の潑刺さをもつて、漱石の眼の前に躍り上がつて来る機巧を持つてゐたのである。それだから漱石は、「日記」を書くにも「断片」を書くにも、勿論自分の感じた事、考へた事、聞いた事、見た事を具に表現する事もないではなかつたが、多く箇條書のやうなものにして書き留めて、少しも

不便を感じる事がなかつた。それだけに我我は、漱石の『日記及断片』の面白味を、十分に感じ得る爲には、簡単に書かれてゐるものの奥を覗き込んで、其所に動いてゐるさまざまなものを探する、想像力を積極的に働かせる必要がある。事實、こつちの想像力を積極的に働かせさへすれば、漱石の『日記及断片』ほど面白い讀物はないと言つて可いのである。

昭和十一年六月二十二日

小宮豊隆

2210

昭和十一年七月五日印刷
昭和十一年七月十日發行



漱石全集第十五卷

著作權者 夏目純一

編輯及發行 漱石全集刊行會

右代表者 岩波茂雄

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地
精興社

(寺島製本)

987
19
53

終